

俳句雜誌

令和元年八月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十二卷第八号

# 水 明

2019 8月号



信 風 節 季



桐箱のふたに

金魚ともみじが

夏らしい

全国大会の懇親会

福引きの主宰賞

みごと射止めて

呵呵大笑

(寛治写)

# 水 明

第1067号

---

―歴代主宰の一句―

灯涼し並べる沙弥の頭は剃り立て

長谷川かな女

夏終る甲斐路にかんばしき地酒

長谷川秋子

矢狭間を尻目に青鷺の大飛翔

星野紗一

# 水明

令和元年  
8月号

歴代主宰の一句

令和の菓子(作品)

庭の花づくし(近詠)

奥野ビル(近詠)

大向うより ※主宰作品の鑑賞

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

鼓笛集(同人作品)・私の一句

現代俳句鑑賞

金の鈴銀の鈴 ※季音月評

☆新珠賞受賞者ノオト

○自選二十句

鶴城讃歌

山本鬼之介

永野史代

大村節代

西山貴美子

茂木和子 森千代子  
矢作水尾 ほか

吉澤純枝 森田祥絵  
鳥羽和風 ほか

大場順子 田中千穂  
森川義子 ほか

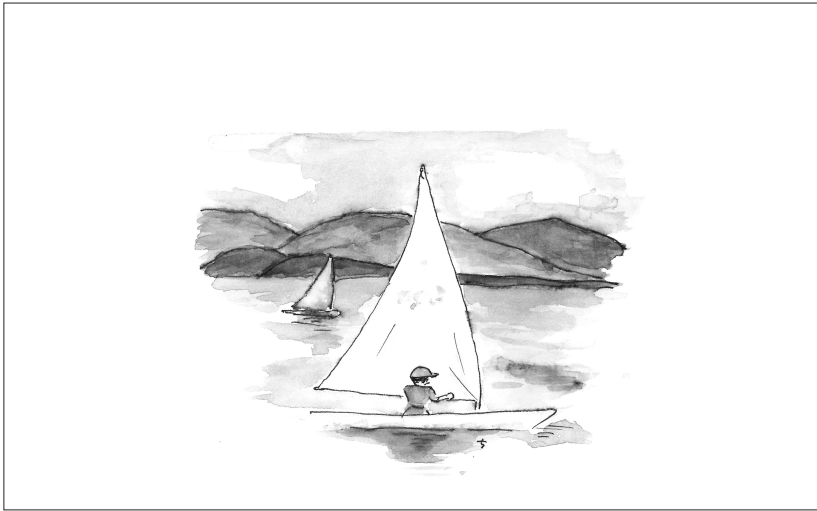
網野月を

町野広子

青木鶴城

網野月を





○自選二十句

実りの刻

○自選二十句

縁の糸

## 水明集

青木 鶴城  
野田 静香

越田 栄子  
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水 琴 窟 (水明集六月号鑑賞)

池田 雅夫

俳誌望見

梅澤 佐江

句集喝采

井口 俊晴

新同人紹介・新誌友紹介

66・67

水明例会報・各地句会報

68・71

水明ホームページについて

76

水明塾・りんどう忌のお知らせ

77・78

水明発展基金御礼

81

風声・後記

80・82

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

---

---

# 令和の菓子

山本 鬼之介

瑞兆の五代の空よ水明忌

残墨の選手を癒す薄暑光

描きすすむ眠き子犬とさくらんぼ

---

梅雨晴や濃緑の帽似合ふひと

献上の夏の和菓子  
の和三盆

思ひかよへば鈴蘭の鈴鳴ることも

明易の斥候  
鴉屋根で鳴く

お染久松想へば翳る夏の月

# 庭の花づくし

永野史代

朝の吸気ローズマリーに触れてより  
散りばめて紫匂ふ花タイム  
ミント咲くむかし懐かし薄荷糖  
振花や観世紙縫の和綴本  
なだれ咲く夕のうつぎは思慕のいろ  
まやかしの匂ひにあらず茉莉花は  
デイルの花小さな恋のはじまり

庭の木々や花々の移ろいは心を癒してくれる。梅、肉桂、柿、泰山木、大王松、ミモザ、菜萸、山桜桃、柏葉紫陽花、皇帝ダリア、皆それぞれに歴史がある。酒中花、観阿弥、光源氏、燕返し（実椿から発芽）、素敵な名前を持つ椿たち。春蘭、立浪草、ラベンダー、アスパラガスの花、バジル……揚げ出したらきりが無い。そんな中で今、私を虜にしているハーブは、その可憐な花と香りで我が家の食卓を楽ませしてくれる。ありがたく感謝！

夕の陽にもつとも近し夏の菜萸  
史代

# 奥野ビル

大村節代

外観は昭和レトロよ夏館  
モガモボの面影過るバルコニー  
きらら虫軋みつ動く昇降機  
コンタリの床は凸凹毛虫這ふ  
木版画飾る小部屋に七変化  
ギャラリ―に夏服の人さんざめく  
館パンを三つ四つ選ぶ銀座夏

知人の個展に出かけた。場所は銀座の奥野ビル。築八十五年余のビルは、超モダンなアパートメントとして建てられたと言う。現在は当時のままの姿で、画廊に生れ変わった。

七階建二棟の小さなビルは街に溶け込んで違和感がない。かつてアパートだった各部屋は、各々小さな展示室になっていて、絵画、工芸、写真、アクセサリー等々、思い思いの作品が展示されている。

テレビや外国のマス・メディアにも取り上げられたとかで、当日も多くの人が訪れていた。私も昭和初期にタイム・スリップしたかのような楽しい一時を過ごした。



# 大向うより

● 主宰作品の鑑賞

西山 貴美子

五月号

辨慶の六法まねて青き踏む

辨慶は歌舞伎・浮瑠璃・謡曲などに脚色され唱歌にも歌われていた。異常な力を持ち、常識を打ち破るなど、人々に親しまれるスター的存在である。「辨慶の六法」と言えば歌舞伎十八番の勧進帳が浮かぶ。安宅の関の富樫と辨慶の間答は余りにも有名である。芝居で大見得を切る花道の引込みでの荒事は辨慶飛び六法である。

ちよつと戯けたような〈片手の飛び六法〉をまねて野遊びをしている光景が見えるようである。

里山の長鳴鶏よ春の空

長閑な、のんびりとした里山の風景が見えてくる。「長鳴鶏」とは鳴き声の美しさを楽しむ鶏の品種で、特に鳴き声の長いものを言う。東天紅であろうか。それとも唐丸とうまる、声良こゑよしかも知れない。

「春の空」の季語の真つ当さ、大きさから、人情こまやかな集落の平穏な日常が感じられる。

ある土地のある日、ある時の景がそこにある。

探偵に詔へ向きの夕霞

春は水蒸気が立ち、野や空や山一面が霞んで見えたり霞が棚引く事もある。「夕霞」とは夕方に立つ霞。他人の動静や秘密をひそかに調べるのを業とする探偵にとって夕霞はびつたり。まさにおあつらえむきである。

ものの本によると、民間機関の探偵社が作られたのは明治二十二年の事。明治四十年頃には秘密探偵社が増え、中にはいかがわしい行為を働くところもあったとの事である。大正五年創立の〈帝国秘密探偵社〉によれば、婚姻・資産・思想・夫婦間の品行などが業務の内容であった。徳富蘆花の〈探偵異聞〉など探偵小説も流行した。因みに夏目漱石の嫌つたもの一つに探偵があったと聞く。江戸川乱歩の小説の素人探偵、明智小五郎の軽妙な科白が夕霞の中へ吸われていった。

気にかかる折線グラフ弥生尽

数量の大きさを表す位置を線で結んだ折れ線グラフ。「弥生尽」は決算期である。バブル期を経験した筆者には、上昇中のグラフが急に下降していった苦い思い出がある。今は骨密度の折れ線グラフが気になる日頃である。

六月号

三代の傘干す庭や夏近し

雨上りの明るい庭。「三代の傘」とは、何とも和やかな光景である。昔は当り前だったが、今は核家族が多くなり三代の睦まじい家族の風景は珍しく特定の風景の様な気がする。ましてや傘を干す庭など、生活の環境も見え、干されている傘の輪郭まではっきり見える様な気がして印象鮮明である。

夏も近くカラフルな傘を干す庭。筆者の幼ない頃の風景と重なり、この句への親近感が沸沸と湧いてきた。

宣戦の深紅のばらを挿頭しけり

〈白いばら〉は純粹・処女性をあらわし、〈深紅のばら〉は熱情・願望・結婚をあらわし、〈黄色いばら〉は不実・嫉妬をあらわす。アーサー王物語の中の円卓の騎士の一人、アンスロットと王妃との道ならぬ恋が思われ、スカーレットのばらが燃え出す様にあからさまになってしまった忍ぶ恋、多くの騎士達の疑惑を晴らす為に試合に出掛けるランスロットの心情も思われる。中世ヨーロッパの物語を下敷にした様な奥行のある世界を感じさせる句である。

緑さす待合茶屋の緋毛氈

料理屋、芸者屋、待合茶屋の三種の営業が三業である。「待合茶屋」とは、男女の密会、客と芸妓の遊興などに店を貸す

待合であり、二業地は料理屋、芸者屋のみである。黒焔に盛り塩、ちらりと見える緋毛氈、何とも粹である。子供の頃、近くに二業地があり、見番や置屋があった。一本立になった芸妓を太鼓持が（お披露目でござい）と連れて歩いているのをよく見かけた。「緑さす」は見越しの松であろう。練り白粉のいい匂いがしてくる様である。

歌舞伎世話物の一つ（与話情浮名横櫛）通称（切られ与三）の一場面が彷彿としてよみがえってくる様である。

黒ビール乾し急先鋒の女A

社会運動や論争など先頭に立つて勢いよく活動する事を「急先鋒」という。昨今は女性の社会的地位も向上している。今国会で内閣不信任決議案が出され、与・野党の攻防戦たけなわ。革新派の先頭に立つ女性議員も目立っている。国会ならずとも、仕事の後の飲み会や女子会などの飲みっぷりの良さもそのトークも際やかな女性が多い。一時代前なら飛ばされる事必定であった。

「黒ビール」は麦芽やカラメルを混ぜた黒褐色のビールである。ついつい深読みをして〈黒〉という文字に拘泥してしまった。黒白をつけるとい言葉もある。白は善、黒は悪の意味をもつ、つまり正と邪である等々。「乾すビール」はやはり黒が似合うと思う。

「女A」とある。女性という表現より、一層女としての特質や成熟度、仕草が見えてくる。「女B」も「女C」もいるのでは、と想像した。

季  
音  
雪



みなづき  
茂木和子

水無月の納屋に揺籠三輪車  
抜け殻に青水無月の夜の雨  
飛ぶ構へ青水無月の風見鶏  
弁天の化粧剥落半夏生  
半夏生とび石づたひに奥座敷

梅  
雨  
森  
千代子

梅雨三日ぬりゑのゑの具はみ出しぬ  
梅雨続く女医の白衣に匂ひ濃し  
仁王の眼に雫を見たり梅雨晴間  
梅雨晴れの朝の抜け道一人行く  
梅雨冷の棚に飲み物並べるて

木下 闇 矢作水尾

生るる匂ひ朽ちゆく匂ひ木下闇  
初島をふはりと浮かせ卯波立つ  
香水の残り香のあり旅靴  
三味線の機嫌上上夏暖簾  
岩影に滑り込ませる罔鮎

木下 闇 山中順子

どう置くも壺の歪みや朝曇  
いつ打つたか膝の青痣半夏生  
濡れしまま串打たれたる天然鮎  
鮎の腸五臓六腑に行き渡る  
僧二人縫ふやうに来る木下闇

蟻地獄 山中みどり

蟻地獄に蟻投げ入るる子の無心  
廓火事の遊女塚なり蟻地獄  
かそけしや蟻地獄吹く砂の音  
陥ちゆくは蟻か私か蟻地獄  
日盛りや砂に埋もる白昼夢

女王花 由良ゆら女

若冲の鶏とても羽抜鶏  
はんなりとうはさ話に水を打つ  
馳せ参ず月下美人の宴とや  
一刻を天寿とかほる女王花  
夭折の秋子師しのぶ女王花

ハンカチ 吉住光弥

砂 紋 石井喜恵

縁台に碁敵急ぐ甚<sup>じん</sup>平<sup>へい</sup>着て  
甚平に下駄薄野あたりからころと  
甚平やはづす肩腰脳くびき  
逸れ蚯蚓の途方湿地に帰しやる  
使ふならハンカチどうぞしあはせに

廢船の砂に還りし夏の浜  
風呼んで広がる砂紋つばくらめ  
雨を呼び雨に散りゆく四葩かな  
木下闇消え入りさうな話し声  
麓までとどく法螺の音山開き

ペンネーム 網野月を

年魚釣 石山かつ子

薄荷タバコ貰つて吸はぬ木下闇  
わたしにはかえるところある麦嵐  
父の日やシウマイ弁当の紐を解く  
梅雨晴れ間一人ジェンガといふ一人  
ペンネームこんにやくおばちゃん夏の朝

久闊をあためてある青とかげ  
激つ瀬を腰で分けをり年魚釣  
梅雨晴間サロンのやうな診療所  
水を渡り岩を渡りて山女釣  
わが眉間かすめて翔ちし夏燕



古墳島 大橋 廻代

蚊屋吊草 栢尾 さく子

黒南風や鷺の成る木の古墳島  
萱草色の日に乗るあそび水馬  
草手折り甕に溺るる火蛾救ふ  
のどさすり鶉の胃をさぐる聴診器  
検診の川鶉仕上げに目薬を

梅雨深し使ふことなきお六櫛  
背戸口に人の声あり葦の花  
浜灼けて蚊屋吊草の穂を焦がす  
踝がさびし漢の白緋  
夏蓬日なかを魚籠の影通る

香 水 大村 節代

蚩 籠 菊池 ひろこ

待庵や居住ひ正す夏衣  
香水も君も「ミツコ」よ相聞歌  
香水や神の教へはしばし無視  
香水に惑はされても自己主張  
オーデコロン自称モボの父はるか

蚩籠匂へり閨の夜明け前  
薫風の京間に軸を捲き下ろす  
薫風やメトロノームをやや速く  
人影に敏くさと薄暑の大回廊  
人形の裳裾に木苾ふる薄暑

新茶 小林萬二郎

司祭館 境 延昭

街挙げて新茶を祝ふ旗の波  
萩焼の手触り新茶を二度賞でる  
土甕に香りを委ね新茶寝る  
鈴蘭にノスタルジアが目を醒ます  
絵手紙の構図に迷ふ梅雨の入り

枇杷熟るる住む人のなき司祭館  
ががんぼや期限過ぎたる非常食  
甚平や隠した筈の脛の疵  
プランターに蚯蚓が背伸びする平和  
はまなすや親潮とほく溶岩の道

日曜版 五明 昇

さくらんぼ 椎野 美代子

早苗田に影の正しき新都心  
勁風を身の糧として鯉のほり  
新緑や朗らかに鳴る昼の鐘  
時の日や「博多時間」の小集まり  
梅雨湿り重たく届く日曜版

なみなみと朝日を汲みしさくらんぼ  
入口は出口の果樹園さくらんぼ  
君の掌にのれば爆ぜるよさくらんぼ  
食むうちに言の葉なりぬさくらんぼ  
朝の卓微笑み返すさくらんぼ

能登の旅 島津初花

朱 夏 永野史代

初夏の能登里海を満喫す  
夏衣御陣乗太鼓の髪乱れ  
老鷺の啼き交はしをり千枚田  
栗の花黄色な雨を降らすかに  
晩学の旅果しなし蝸牛

男坂ゆつくり上りきる薄暑  
白墨折れる教育実習生薄暑  
薄暑かな鎖骨あらはな少女来る  
貝殻骨に羽生えてゐる聖少女  
ケ・セラ・セラドリス・デイ死せり朱夏

鬱の字画 鈴木康世

六 月 西山貴美子

面倒な鬱の字画や薔薇香る  
薔薇百花百の香りと吐息かな  
紫陽花や喜怒哀楽の固まり来  
意を得ざる別れまたあり濃紫陽花  
百彩の薔薇に紛れて旅立てり

添へ文にめでたくかしこ梅雨に入る  
梅雨湿り青信号を待つてゐる  
梅雨ぐもりスマホ少年炎上す  
半夏生ワインゼリーを一掬ひ  
バスタブに水無月の膝伸ばしけり

道祖神 波多野 寿子

はたた神 星野 和葉

梅雨晴れや極彩色の道祖神  
青田波囃す双体道祖神  
青葉闇抱き合つてゐる道祖神  
夕立の後あざやかに道祖神  
青田風古びてゆかし道祖神

石棺の湿りに蜥蜴身じろがず  
外階段音立て降りぬはたた神  
産土の路地裏なじむ日雷  
遠雷や庭に俎板筑二つ  
折鶴の飛べない羽を梅雨じめり

(順送り)

斑猫 服部 みどり

葎切の岸辺に弛ぶ靴の紐  
泰山木の花を眠らす夜の匂ひ  
尺蠖の尺の狂ひし風の中  
斑猫や杖もこつこつ横つ飛び  
夏萩や猫に小さき通ひ口

☆

☆

# 季音月

花時計

吉澤純枝

風筋に七癖のあり夏柳  
 梅雨晴れの養蜂箱の唸り出す  
 飛天図の指の先より梅雨の蝶  
 日時計の影読む生徒時の日よ  
 時の日の指針つまづく花時計

青嵐

森田祥絵

黄菖蒲や谷津田に絶えぬ紋り水  
 抱卵の鷺満月に白晒す  
 梧桐の花の零るる屋敷神  
 修善寺で茶筌を買ひし今年竹  
 山鳩の胸たくましく青嵐

奥能登

鳥羽和風

奥能登や地酒に鮑の踊り焼き  
 暴れ打つ御陣乗太鼓夏怒濤  
 朝市の女したたか蟾蜍  
 老鶯の声もこぼるる千枚田  
 塩田に夏の潮撒く力瘤

柿の花

高島寛治

蚯蚓出づ沈黙の夜を引き摺って  
 汗拭ひ確と手に持つ男坂  
 表札のひとつは新たな柿の花  
 柿の花はたちの母の古写真  
 釣り上げしつの字しの字の穴子かな

水無月

小倉倭子

解禁の川の勢ひ鮎光り  
 紀の国の宿で解せり鮎の骨  
 祝膳の鮎の塩焼き尾が立つる  
 注ぐ思ひ注がれし念ひ夕薄暑  
 思ひ残し淡墨いろの街薄暑



麦 秋

宇田白鷺

山裾の青葉がくれに寺の屋根  
山門を見上ぐる初夏の明通寺  
麦秋や仁王の腕に乾く塵  
三方湖のとろりと凧ぎて早かな  
渡岸寺や早川なるごろた石

生きる力

井上燈女

鎌一丁買ひ足す農夫麦の秋  
麦秋や砥石を畦に置き忘る  
父の日や児の書く絵にも母のゐて  
揚羽蝶大道芸へまぎれ込む  
紫陽花や生きる力となる俳句

はにかむ

柚木治子

光二師の破顔はにかむ水明忌  
蚊がもてる母性本能血を吸はる  
息災を新茶に替へて届きけり  
気付かざる人生の滋味新茶汲む  
穴子焼く匂ひにまぶれ長子来る

立 葵

森本早苗

ロングドレスすくと纏ひぬ立葵  
竹落葉開ける先に古墳群  
水打つて格子戸の奥大童  
参道の馴染のめし屋鯖の寿司  
梧桐や修行大師の丸き顔

初 夏

田寺玲子

時の日の子午線の町潮明り  
タラップを降りて緑雨の街歩く  
おのころへ渡る大橋虹の下  
ミシュランの三つ星の店初夏メニュー  
黒南風や纜きしむ船溜り

どくだみの花

中尾笑子

どくだみの花の越境ゆるしをく  
何かある芍葉の白くづれ落つ  
洗ひたてのやうな海風六月来  
ががんぼや目まひふらつきまだ癒えぬ  
その奥の闇を深めて蛍とぶ

ボート漕ぐ 渡辺 舍人

向き合うてボートの二人浅からず  
ボート漕ぐ地球をすこし撥つて  
光悦の紺たらんとし朝兒は  
我が思わが膚甘いのかしら蟻走る  
青大将すすむ詩魂盗らるるな

鈴 蘭 田村 みどり

人声も濡れて小雨の菖蒲園  
はみ出せるカーテンの裾梅雨の蝶  
閑かなる靈園が好き梅雨の蝶  
近道が暮れてほのかに君影草  
植ゑしおぼえ無きに鈴蘭庭隅に

親子船 丸山 マスミ

髪切りてうなじにほのとオーデコロン  
草笛や下流は信濃川となる  
明易や旅の枕に来る瀬音  
糸みみず買うて釣果の胸算用  
父の日や波蹴立てゆく親子船

坐禅行 伊藤 敦子

青葉風筒抜けて行く坐禅堂  
警策の音に夏蝶とびたちぬ  
二度までも警策を享く青葉寺  
はつなつや半眼過る僧の爪  
首夏の堂秘宝の軸にまみえたり

金曜日 町野 広子

香水つけ定時退社の金曜日  
マニキュアもコロンも御法度ウエートレス  
草笛を吹きて教へる餓鬼大将  
リュック一つ初夏の若狭路へ  
歳重ね露の苦みを好みたり

木下閣 岡野 順子

木下閣猫の親子がじつと見る  
公園のベンチ坐れば何処より蟻  
蟻一匹くんくんと餌に何を嗅ぐ  
行く雲に託す未来よ水明忌  
ねぢ花や首がくがくとしてきたり

打水 十倉和子

唐突に子曰く雨蛙  
水鷄鳴き渡し場けふの旗下ろす  
水打つて夕風通す路地住居  
水打つて盛塩整し赤提灯  
水打つて呼び込み弾むどさ回り

立葵 川野妙子

愛らしき園児の散歩立葵  
しよほしよほの目をもてあます梅雨の入  
香水の香りを残し客帰る  
短夜の天井高き檜風呂  
生き生きと生きよと便り薔薇ひらく

鶴賀節 松本光子

梅雨晴間梯子担いで弟子来たる  
長靴を逆さに吊し梅雨晴間  
着馴れたる甚平袴に通りますぐ  
泥鰯鍋酔うてひとふし鶴賀節  
校庭の茂りに僕と金次郎

新緑 内田恵子

野面積みの崩るる城壁蜥蜴出づ  
緑さす間歇泉を待つ足湯  
新緑や駆け抜けてゆく人の影  
錨広の帽子の揺るる牡丹園  
他愛なき嘘も許せず露を煮る

香水 藤澤喜久

ジーンズの着物小粋に梅雨晴間  
すれちがふ恋は曲者夏の蝶  
香水の空壇潇洒クリムト展  
桑苎夜店の指輪のごとつぶら  
絹街道桑の実を挽ぐ子等もなし

金魚 荒井俱子

明け易し入眠剤はまだ効かず  
短夜にさめて手足に活を入れる  
新入りの金魚「令和」と名付けたり  
改元や昔は路地に金魚売  
栄転も左遷もなく金魚飼ふ

夜空の光 池田雅夫

七月の夜空後光の如くなり  
真向ひのビルを直撃はたた神  
街上空どつかと坐る夕立雲  
握る手のしつかと節に日傘ひからかき

炎天下言葉少なに行商婦 霜中冬至

明通寺  
ゆづりはの門前しづめ明通寺  
木下闇歩をたしかめて今日を生く  
無造作を着こなす少女夏の服  
ひとさまを信じ切つたる燕の子  
能登路にも若狭に似たる立葵

湧水池 加藤むら子

万緑の道七曲り湧水池  
草いきれ牛優先の牧場道  
麓にて御祓受くる山開  
菖蒲園水車も消えし元田んぼ  
コンクリの滝の紋様レース状

黒南風 川崎道子

青嵐賓客を待つ車寄せ  
毛虫焼く己に潜む夜叉心  
朝帰り額にかかる蜘蛛の糸  
神木の小枝に縋る蛇の衣  
黒南風や撞木の綱の薄じめり

身辺り 井関礼子

新茶の香先づ水出しを含みけり  
ひとしきり鳥の口上五月晴  
雨を欲る狭庭の草木夏兆す  
朴若葉の気を満身に漫る途  
半生を棲みて故郷や柚清水

☆ ☆

# 季音花

時の日 大場順子

待ち人の現れて噴水高上がり  
時の日の銀座を統ぶる時計塔  
芒種かな農の奥義を子に伝ふ  
明日に畳むハンカチーフは海の色  
ハンカチに今日のとときめき折り込みぬ  
メトロノーム 田中千穂  
一様の井戸の呼び水火取虫  
時の日やメトロノームのつまらなさ  
時の日や時計をおかぬ秘湯宿  
風知草悟り切れずに裏表  
紫陽花や今日はどの服着ようかな

蘆青む 森川義子

蘆青む影の深さに稚魚の群れ  
久遠寺の女坂ゆく薄暑かな  
夕ぐれの瀬音幽し鮎の宿  
紫陽花を咲かせ定年なき家業  
梅雨晴やビル建設の火花散る

夏木立 松宮保人

万緑を登れば式部筆の跡  
三重の塔に相輪夏木立  
みな九頭身ばかりなり立葵  
軒深き古寺の静寂や夏木立  
噴水の間歌楽となりにけり

車椅子 宮崎雅訓

ででむしと遅さ等しき車椅子  
車椅子夜は安らかに夏の夢  
梅雨空や外に出られず車椅子  
車椅子押す人の背に風薫る  
風鈴を付けて進むや車椅子



鈴蘭燈

山田美佐尾

子供みなきらきらネーム夏祭  
すずらんの香りただよふマリア像  
半夏雨や鈴蘭燈をけぶらせて  
生涯を口紅ささず蕎麦の花  
雷鳥は神の使ひかと思ふ

夏は来ぬ

井口俊晴

短夜や夢の続きを見ぬままに  
風の朝掃けば病葉ばかりなり  
ブラウスに肌色透けて薄暑かな  
新緑や花嫁祝ふ鐘響く  
夏掛けをはねて寝てをり午後三時

繡線菊

福田藤十郎

繡線菊や男はじめて恋を知る  
女みな乙女となりし田植かな  
六月や娘にそつと岩田帯  
転がして釣りたる鮎の深傷かな  
大皿に鮎の並べば唐三彩

木下闇

井上玲子

木下闇狐稻荷に妖気満つ  
陽光を弾きてたわわ桜桃  
薫風を窓に引き寄せ夜想曲  
縁側へそよぐ薫風賢治の詩  
土返す其処はまほろば太蚯蚓

旅靴

鈴木みや

花菖蒲咲きし数だけ言葉あり  
炎天の屋根の瓦は愚痴いはず  
梅雨に入る思案たらたら旅靴  
夏シャツの釦が逃ぐる指の馬鹿  
六月を好きにはなれぬ老いし妻

父の日

野口和子

ラベンダー通り抜けたる風旨し  
三百六十度新緑のなか時空間  
風鈴や風の道ある厨口  
梅雨晴や交尾させたき山羊二頭  
贈り物届きて気づく父の日よ

吐息 秋山冷子

夜の蟬学寮に乾す背番号  
若葉光独り占めして乗馬の娘  
病葉や文士の墓の名刺受け  
恋の話解けてしまひし欠氷  
夏柳吐息攫つてくれまいか

竹若葉 西浦千枝子

晴れ渡る忍者の里の麦の秋  
杣山へパズル模様  
植田へ映る信号機見て発進す  
順路なく行きつ戻りつ菖蒲園  
渋滞は田植機横断うすぐもり

ジャカランダ 中野 疆

伊豆の海ぱつとひろがる薔薇の園  
朝浜辺ジャカランダ咲く散歩道  
南国の乙女うつむくジャカランダ  
鳥の巢の通信妨害風薫る  
東京タワー見晴らす丘よ濃紫陽花

胸 鱈 上戸千津子

機械化に苗打役も死語となり  
梔子を信じて明かす独り言  
飛魚の胸鱈きらり飛行艇  
遠声は氣象予報士雨蛙  
夏木立の透間を自在雲の脚

瀬八丁 松山清子

ゆるゆると青水無月の瀬八丁  
あさぎ咲き陛下名付の鯉浮かぶ  
黒南風や軍艦島は歩く歩く  
紫陽花の中の四阿べちやくちやと  
朝刊の重み増しをり梅雨の入り

標本木 福田千春

緑陰や今はひそかな標本木  
ほつれ毛の首にまつはる夕薄暑  
鎖骨美人の揺れる真珠や街薄暑  
丸ごとを蒸せと付記ある玉葱来  
緑青の鳥居を我と若葉風

梅 雨 菅原知子

クリムトのうすら笑ひや梅雨に入る  
手洗ひのブラウスに糊街薄暑  
蕎麦猪口を蛸唐草に薄暑かな  
藍浴衣スマホ片手のポニーテール  
伽羅露のまだ近づけぬ母の味

夏の山 後藤綾子

ごろごろの岩剥き出しの山登る  
山清水口しびらせて若返る  
暁の郭公一と声それつきり  
父の日の駅前食堂オムライス  
幸せをかみしめてをり生ビール

譲らず 加藤草太郎

八十の瀬を越えて綺羅ます吉野鮎  
鮎の腑を口にふくみて積り酒  
病み人となりて譲らぬ片かけり  
麦秋やゴッホの耳を捜す絵師  
呼び笛はふたりの符号あいの風

こひごころ 梅澤佐江

夏落葉太古の杜の渴きとも  
鈴蘭やアイヌの里はダムの底  
「それいゆ」の憂ひのをとめ君影草  
揚幕へ飛び六方を夏歌舞伎  
夏薊岩をも通すこひごころ

口漱ぐ 矢島清

わけもなくかたまり歩く子らの夏  
声かけてやればでで虫転げ落つ  
賜はりし四恩の日日や南風の風  
畦道や予感の先に動く蛇  
口漱ぐコップの水に夏日射す

山 梔子 松井由紀子

忌の家の井戸ひつそりと瓜冷やす  
遠雷や黄身とろけ出る目玉焼  
梅雨ぬるし水生の虫になる気分  
荒梅雨の沼傾いて地を洗ふ  
いつまでも山梔子匂ふ静寂かな

梅雨の蝶 野平 美紗子

六地藏の足元低く梅雨の蝶  
日が差して遊びはじめる梅雨の蝶  
麦茶一服唄のさはりをひとくさり  
冷し麦茶のセルフサービス混む眼科  
海芋咲く神社の水車しぶき上げ

「散歩道」

シルクハット 波多野寿子

「私は武士の娘です。」記憶に新しいNHKの朝のドラマの科白……。私は祖母を、思い出しました。  
昭和十二年に、はじまった日支事変、此の時代に祖父は亡くなりました。当時私達は、会社の社宅に住んで居ました。お焼香に来られた人の中に、シルクハットの紳士も居ました。それを見た近所の人は「此の家の人は何者だい」と、こそこそ言っていました。祖母は一言「私は武士の娘です……。」とさ。

特集

固有名詞の力 俳句における  
はたらきと可能性

巻頭作品10句

茨木和生・大高翔・笹瀬節子  
鈴木貞雄・鶴岡加苗・永方裕子  
能村研三・星野高士

俳壇

8月号

7月14日発売  
定価800円(税込)

巻頭エッセイ  
本井 英

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句II……大島雄作・奥名春江

新連載 俳壇史エピソード……坂口昌弘  
続・日本の樹木……広渡敬雄

連載 俳句における「写生」の周辺……栗林 浩  
近代女性俳人伝……坂本宮尾

特別寄稿 富澤赤黄男戦中日記……川名 大  
俳壇時評……松下カヲ／俳壇月評……三宅やよい

俳句と随想12か月 はりまだいすけ・江崎紀和子

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話 03(3294)7068 振替00100-5-164430

俳誌望見 梅澤 佐江

『響焰』 令和一年五月号 通巻六一一号

主宰 山崎聰 発行所 千葉県八千代市

昭和三十三年三月、和知喜八が川崎市で創刊。師系加藤楸邨。「現在にたいま生きている人間をふたりこころで詠う」を理念とする。  
(二〇一九年俳句年鑑より)

山崎聰主宰作品 「草加越谷」 一〇句より

望郷は春のはじめのわらべ唄  
春眠のところどころの海の景  
春塵の草加越谷みちのくへ

みちのくへの措辞が奥の細道へと誘う。かつて松尾芭蕉も通った日光街道の草加越谷宿、今の世は車で一走りだが春塵に塗れながら歩む芭蕉と曾良の姿が目に浮かぶようである。

一頁目「瘤と丸善」光焰集、白焰集より各一名を主宰選。

木の瘤が瘤の夢見る月夜かな

丸善に何を置こうか十月は

石倉 夏生  
松村 五月

選評を要約すると(二句共具体的に意味を云っていない)

俳句は意味を云う詩ではない。むしろ意味を拒否するところから詩が始まる。木の瘤が瘤の夢を見る。丸善に何を置こうか。意味を云っていないから面白い)

光焰集は、九名の幹部の自選作品で正にふたりこころに感応させられた。

火炎土器ははるかなまつり春立ちぬ

追憶の通りに冬の海に出る

寒ぼたんもうこれまでかいや違ふ

朱焰集(自選)、青焰集(自選)、白焰集(自選)、白灯集

は白灯対談として主宰より一二句の選を得ており、力作より三句。

三句。

春二番エルム通りの和菓子店

立春のきのうとちがう色の影

わたくしの場所お日様とたんぽぽと

第四六回(平成三一年度)響焰賞は該当作品がなく佳作四

席となり、例年に比べレベルが低下しているとの選考委員諸

氏の感想だが、一年に一度同人会員の勉強の機会が作られて

いる結社「響焰」は「響焰は薔薇の花束ではなく、名もない

個々の花の集合体である」という先師和知喜八の精神が脈々と

息衝き引き継がれていることを改めて感じた。

巻頭は主宰選の火炎集で白灯集以外の同人より一〇句、エ

ッセイ、中堅同人による主宰句鑑賞、同人による同人句鑑賞

の火炎集、俳人の句鑑賞の現代俳句の窓、幹部による鑑賞の

響焰の俳句を読む、受贈誌より一誌一句、主宰の句集を他の

結社の方による鑑賞の俳誌交換、白灯集巻頭作家の特別作品

等、詩精神を保ち、山崎主宰の「俳句とは自らの思いを思い

きり言葉にして叩き付ける事、自らの命を確かめる作業であ

る」が浸透し、想像力を掻き立てる句に満ち溢れていた。

和田 浩一

石倉 夏生

栗原 節子

川口 史江

小林多恵子

北川 コト

# 現代俳句鑑賞

網野月を

花冷えの街に肩組む酔っぱらい 馳 浩

〔俳句界〕六月号・「人情の機微」より

切れの無い句、つまりは一句一章の句といふべきか、緩やかな切れで繋がっている句といふべきか。一読すると「街に」がどの程度効果のある措辞なのか測れないところもあるのだが、切れが緩やかであることを考え合わせると俄然「街に」の存在感が見えてくる。上五の「・・の」で切れていると考える向きも有るかも知れないが、これはどうしても次の「街」に繋がる。「街に」の後に切れが来ると披講した方が良い句である。

菖蒲苑の高きを通る車椅子 上藤おさむ

〔俳句界〕六月号・「泰然」より

この句も句中に切れが見出しにくい。句の魅力は「高き」にあつて、「高き」の提示に車椅子との関係性から面白みを演出しているのである。

木枯や黙禱絶えぬ国に生き 吉住 光彌

〔俳句界〕六月号・「生きる」より

作家は水明の大御所の御一人である。上五の「……や」で

明確な切れを創り出して、このリズム感に先ずは安堵する。上五に季語「木枯」を配置していて、ポジティブな内容とは決して解せないと考ええるが、それでも「生き」る矜持のようなものを感じて心澄む余韻が残る。

弟のトマトをかじる音の中 及川真梨子

〔俳句〕六月号・「秀句25（高野ムツオ選）」より

「弟のトマト」ではなくて「弟の……かじる音」であろう。選者の高野ムツオ氏の記事に弟おもしろい方という様に紹介があったので、先ずはその音に近い距離感を感じるのである。音の聞こえるところに作者がいると言ふことである。

開戦日が来るぞ渋谷の若い人 大牧 広

〔俳句〕六月号・「朝の森」五十句抄より

無季である。十二月八日が来るという意味ではない。これから近い将来に「開戦日が来るぞ」と警告を発しているのである。「渋谷の若い人」はある意味で利那的な享樂を貪っている象徴として引用しているように考えられるだろう。無論「渋谷の若い人」にも将来を危ぶむ人はいるだろう。ということとは他人への警告ではなくて、読者へそのベクトルは向けられているのである。……その時あなたは毅然として「反

「対」を声に出せますか？！というように自分自身に引き付けて読みたい。

梅が香の飛龍の紅を一枝折る 落合 水尾

〔俳句四季〕六月号・巻頭句より〕

「飛龍の紅」は梅の銘であろうか。床の間の花瓶にでも活ける為に一枝を折ったのであろう。飛龍の紅梅は大垣市光受寺のそれが有名だが、他所にも同名の銘木が在るらしい。光受寺のそれならば、枝垂れ梅である。筆者は「紅（こう）」と音読してみた。

玄界の大灘晴れを鳥帰る 岸原 清行

〔俳句四季〕六月号・「鳥帰る」より〕

この句は実際にこの景を見た方か、もしくは彼の地に住み暮らしている方の句であろうと思う。毎年見ている景に改めて時の移りゆくことを深く感じている。俳句の王道の句である。「大」は「晴れ」の見事さを形容していると解した。

トンネルの上に海あり天の川 栗林 浩  
パリ―祭川に棄てたる鍵の数

〔句集「うさぎの話」より〕

前掲句は、天体の新神話の様でもあるのだが、目次《七、虹へゆく階段》や小見出《海の切手》そして前後の句から推測するに「ユーロトンネル」のように考えられる。多分そうであろう。別名を「英仏海峡トンネル」または「ドーバー海峡トンネル」とも言う。現地フランスや、イギリスでは「キ

ヤナル・トンネル（海峡トンネル）」とのみ呼ばれている。ただ、正確な地理を言い当てて読んでも詰まらない。それよりも海の下の地中と海とそして天空を詠んで、作者自身はその中間に生きる人間を自覚している、と読みたい。この句の雄大な構図の中の人間の在り様を具体的な言葉で表出することなく、構図のみで提示することに成功している。この構図の中の何処に作者が位置しているのかは、俳句の型をフルに活用してこそ表現できるのである。

この句集には他に三句トンネルの句が存在する。次掲句は同じく《七、虹へゆく階段》の《北駅》の第一句である。「鍵」が何の鍵なのかは筆者には皆目わからない。その分、ファンタジーであり、物語性を感じるのだ。パリの橋といえはセーヌ河に架かるポンヌフ橋か芸術橋くらいかと考えられるのだが、《北駅》とあるので旧市街地の北東部にある北駅周辺の運河に架かる小橋かも知れない。そう仮定すればまさにプッチーニ作曲のオペラ「ラ・ボエーム」そのものとなる。それにしても「鍵の数」とあるので棄てた鍵は複数あったことになる。そこに筆者はまた想像を掻き立てられるのである。表題ともなつた、

イギリスのうさぎの話灯を消して  
目と耳を置いて消えたる雪うさぎ

の二句の他に、

中ほどがさびしい花のトンネルは  
くちびるといふ春愁の出口かな  
大根を吊るだけと言ひ釘を打つ  
などがあり秀句揃いである。

# 金の鈴銀の鈴

◆季音六月

町野広子

しだれ桜お城の庭の野点傘

波多野寿子

初夏の海写して浜の理髪店

鳥羽 和風

国宝松本城。天高く聳える硬質なお城と、その庭で繰り返り広げられる優雅な野点。大きな傘の下に和服の人々の音のない立居振舞。緋毛氈が目を惹く。お城に桜は付き物ではあるがその中でも掲句では、しだれ桜が登場。野点の席なればこそ選ばれた桜。優しくしな垂れる花が、それは見事に場を盛り上げる。異国人の写真撮影がいつ迄も止まない。

暮の春 柎目の細き女下駄

山中みどり

近頃では下駄を履く機会も久しくなってしまったが、掲句の柎目の細い物は、軽くて上等等桐の下駄であろう。何気ない足下に目が行き届き、スパッと言い得て居られるのは流石と敬服。筆者の幼い頃の親世代は普段和服に下駄、子供にも新年には新しい下駄を用意してくれた。今も我家には箱のままの下駄が何足かある。何とも言えぬ哀愁を覚える一句であり、季語が動かない。

理髪店の大きな鏡に写る夏の海。鏡とは一言も言っていないが「写して」でそれと理解出来る。どれだけ言葉を削るかの句の世界で成功している。海を写しているのだから浜のどうか、村のでもいいのでは、岬でも丘でもいいのでは？と考えてみたがやはり、海に最も近い浜の店なのである。客も店主も、そして後ろで待つ人も写す鏡。初夏が清々しい。

初つばめ空の広さを計りをり

高島 寛治

燕が飛来した時は、すぐに気付く。クチユクチュルルと鳴きながら飛び回るからである。今年もその季節となり燕の姿を確認した作者。当の燕は無事に渡って来られた安堵と喜びで、空を自在に又は地面や水面すれすれに狂ったように翻る。その姿はまるで空の広さを計っているようだと思う作者生き物に対し愛と言う優しさがなければ気付かぬ風景である。



## 花の雨音を立てずに飲むスープ

石井 喜恵

文化の違いには、色んな場面でお会合がある。食に対するそれも大きな違いがある。掲句のスープを飲む場所では、飲む音は勿論食器の音さえ禁止。一方日本の文化では、蕎麦やうどん、ラーメン等は音を立てて啜りながら頂く。異国の人から見ればマナーが悪いと見えるらしい。今作者は静かにスープを味わっている。外は花の雨人も車も静かな一日。

## 出来立ての草餅添へて回覧板

田村みどり

ほのぼのとしたご近所付き合いが見えて来る。たった今作ったばかりの草餅のお裾分けと共に回覧板を隣へと回す。届ける方と受け取る方共に良好の関係を保っている。昨今では隣の人の顔も知らない、近所付き合いは煩しいとの理由で自治会に加入する人も減っている。「遠い親戚より近くの他人」ですよね。ご縁を大切にしましょう。

## 初蝶のそれより白き産着干す

大場 順子

何も言う事なしの一句。干した産着は初蝶よりも白いと言う感覚。これは干している人の喜びや幸せ、感動に深く繋がるとどんな色にも勝るのは白。無垢・無心・無欲これらを色に例えるならば、やはり白と答える。産着とは正にそれに値する穢れない物。春先に見つけた蝶の白さに心を震わせた作者ではあるが、何物にも勝る白い産着幸多き未来を祈る。

## 調子とる金太郎飴春の屋

山田美佐尾

何処を切っても同じ顔が出て来る金太郎飴。細く長く棒状に飴を伸ばしつつ、包丁の音を立てながら、リズム良く切っていく。小さな飴が板の上いっぱい出来上る。川崎大師の沿道でもそれは見られつついつい見入ってしまう。手元も見ずに時には板だけを叩き調子をとる。トトン、トトン、トントン見事なパフォーマンス。作者は春の一日を楽しむ。

## 羊羹の厚みに見合ふ新茶かな

池田 雅夫

羊羹にはとびきり熱く濃いお茶が付き物。思いきって厚切りにした羊羹。甘さではなく厚みと言ったのがより現実的であり、新茶なればこそその詠嘆。新茶の香を楽しむが茶葉によつては、湯温・蒸らし時間等々で絶妙な味と香の違いが出来る。作者はこのすべてをクリアし、至福の時を過した。

## 露天商一店来たり春祭

松宮 保人

本来は夏の季語である祭り。掲句は春祭なのでもう一度秋の本祭があるのかも知れない。現在筆者の住む所も年二度の祭りがある。しかし、年々子供の数も減り、かつては賑わっていた境内には、今年はたった一つの露天が来ただけ。それでも太鼓や笛が聞こえれば祭り気分は最高潮になり、子供達もうきうき。昔ながらの伝統や風習は大切に守り継いで行って欲しい。故郷を離れて住む子や孫の為にも。

# 自選二十句

青木 鶴城

早起きの大股散歩梅早し  
酔ひ醒めの羽織一枚花篝  
かぎろひて光背得たり大仏像  
燕来る心の晴れぬ晴れの日  
巢の鳥も雨滴に悟る安居かな  
香煙に天平の風鑑真忌  
葉桜の風に城址の人馬像  
入道の顔が阿修羅に雲の峰  
花柄の単衣に惹かれ踊りの輪

山の端の入陽の余韻金木犀  
秋麗やいま一天に曇りなし  
返り花古稀同窓会の百余名  
冬晴れや丸み帯びたる水平線  
白襪を日毎に重ね山眠る  
明星へかうべを垂れて日を数ふ  
日輪の溶け入る伽藍滝凍る  
古稀迎ふ節目の覚悟初日記  
異国語の振袖小町初詣  
ほのぼのと齡重ねて姫始  
名跡を継ぎて父子の初稽古

## 鶴城讃歌

網野 月を

水明入会二年にしての受賞は快挙かも知れない。日ごろの鍛錬の成果であろうとお察しします。

先ずは、氏の新珠賞応募作品から特に優れていると筆者が考える作品を揚げて鑑賞しましょう。既に「選評」において触れていますが、言い足りない向きがあつてであります。

風入れの古筆読み解く眼かな

「古筆」は千字文輯のようなテキストから卷子や冊子のよ  
うな所謂「切」まで想像されますが、掲句では「古筆」との  
み表現されています。掲句では「眼（まなこ）」が句の眼目  
になっている所為で、「古筆」を巡る部分は幾つもの解釈が  
出来る訳ですが、そこは詠み手に任されていて、任された分、  
価値観が立体的に盛り込まれていることになりました。上五の  
季語「風入れ」は夏の季語で、通常は「曝書」「虫干し」「土  
用干」などと用いますが、要は夏の季感で担保していること  
が良いのでしょう。正倉院のように十一月の行事として位  
置付けして、晩秋の季感の中で解釈しては文字通り「読み解  
く」暇が無いのです。如何にも土用の、夏休みの一コマなの

です。

半世紀ぶりにギターを天高し  
中七の助詞「……を」の使用方法が巧みです。動詞を添え  
ることがなくとも十分に句意をくみ取ることが出来ます。た  
だ「天高し」は屋外のシチュエーションであるのに、ギター  
は何処で弾いているのか？イメージを固めにくい感も残りま  
す。「天高し」の季題は時候から来る気分も表現しますから  
空間的な確定は求めないのが現代俳句の手法にも当て嵌まり  
ます。

前述の二句共に一句仕立ての句と解することが出来ます。  
前掲句は切れ字の「かな」を用いて、後掲句は季語であるところの「天高し」という終止形を用いての切れです。両句とも切れの在り様から、若干の余韻を残すような工夫が感じられます。

応募句の十五句の内このような一句仕立ての句は三句のみ  
で、多くは中七と座五間での切れを持つもので七句あり、上  
五と中七間で切れを持つものが三句あります。他に破調が一  
句と三段切れが一句であります。一句仕立ての三句の内二句  
は座五の後で見事に切れているし、破調の句も座五の後で切  
れを持っています。中七と座五間での切れを持つ七句と上五  
と中七間で切れを持つ三句はいずれも五音の部分に季語が配  
置されています。つまりは切れについての十分な配慮が感じ  
られる訳です。

氏ご自身からと主宰から頂いた資料に拠りますと、氏は唐  
津市のご出身で青春時代を野球部と青少年赤十字社の活動に

明け暮れていたようです。俳号の「鶴城」は唐津の御城に縁因するということであります。五十数年前の東京オリンピックでは聖火ランナーの伴走者として参加されており、俳句に示す積極性や普及推進部での活躍ぶりは「初球ストライクを見逃さない」「ボランテニア精神」に繋がっているように思われてなりません。

今までリリースしてきた自選句のリストを頂きました。その中から数句をご紹介しますと思います。

和紙睨みたつぶりと墨風光る

脳中を無にして写経秋澄めり

筈を掘りて地主に礼を言ふ

これら三句は以前に新珠賞に応募した際の作品です。何れも情感が迸っています。中でも「和紙睨み」の句は、氏の生い立ちが書家の系譜であるということだけでなく、文宝のうち二品を登場させての句作りにある種のストーリーを感じさせられます。座五の季語「風光る」の斡旋も的確です。他の二句も合わせて動詞的要素を二方向から詰めている点も季語の時間との要素も含めて安定感を現出している構成要素として句の在り方を決定していることになっています。

昨年リリースした句には

陽炎に工夫の踊る鉄路かな

運動会プログラムに無きつむじ風

があります。この二句の新味さは秀抜でしょう。特に「陽炎に」の句は氏の代表句の一つとして今後呈示されることにならるでしょう。「工夫」は一体何を表現しているのでしょうか？

作者にとつては何か意中の物があるのでしょうか、ここまで突き放した表現ですから、読み手が勝手に解釈することも許されるでしょう。筆者は操車場か何かの場での陽炎の濃淡を表現しているように解釈しました。

末筆ですが、氏の作句の切っ掛けは二〇一七年四月の「はじめの俳句教室」ということであります。その教室での作句が保管されていて、このノートを執筆すると言うので資料として頂きました。その句が、

新緑を天に突きさす櫛枝

であります。氏ご自身はこの句が処女作ということを知っています、教室の一日目の作が主宰の手に残されていて、

春風にカバンが踊る通学路

若草を摘む初孫も初登園

という二句が本当の処女作ではないかと考えられます。この句には主宰の添削も添えられていて「春風に踊りつづけるランドセル」「若草を摘みつつ孫の登園す」と添削されています。処女作が残されていることを羨ましく思うと同時に、今後、三年目からの作句に注目したいと存じます。

氏の最新作をご紹介します。

頂きの視界一瞬梅雨晴れ間

です。ある句会で一緒に投じた際の句です。小槍からの文字通り一瞬の景でしょうか。景観の描写を封じ込めた分、景への無限の想像が読み手の心内に拡がります。詠まずに読ませるということは氏の読み手への信頼関係から成立します。僭越ではありますが、どうぞ佳き句友を得て益々の飛躍を祈念いたします。

# 自選二十句

野田 静香

すれ違ふ佐保姫の影萌黄色  
絵葉書の消印滲むなごり雪  
かさぶたが剥がるるやうに春動く  
歌声が降りて来る道春の山  
楽譜にはなき青空に百千鳥  
子らの目を遊ばせてゐる蝌蚪の紐  
酔ひ醒めを橋にもたれて春の宵  
一陣の風滑りくる青田かな  
思慮深き母の指輪や涼み船

足首の白きが急ぐ遠花火  
夏霧や橋渡るまで振り向かず  
悲しみも一緒に啜る心太  
秋立つや風のめぐりし星座表  
会話にもスパイス利かせ秋灯火  
地球儀の遠き国より渡り鳥  
始まりはチェロの独奏秋深し  
命名の清書掲げし小春かな  
ゆるキャラの愛称連呼雪まつり  
ドラキュラの話佳境に冬館  
襟巻を振って別れの船出かな

## 実りの刻

矢作 水尾

れたという。

母の手を重ねて摩る雪催

「親子の情愛は、幾つになってもかわらない親想いのほほ  
笑ましい姿がありありと…」星野前主宰の講評。

露あまた草の命を輝かす

「露と草とは切っても切れぬ縁、草の葉は、夜露と結び朝  
の日の出前には朝露がびっしり宿っている。百人一首の歌を  
思い出す。」

と星野前主宰の講評。

白壁の夕日を返す蔦紅葉

星野光二前主宰が「毎日新聞俳壇埼玉版」の選者をされて  
いたおり特選に選ばれた句である。

この句の主宰の講評は、白壁と夕日と蔦紅葉の三点セット  
的が絞られている。生命力が、みなぎると結ばれている。

そして静香さんが水明俳句会に入会の切っ掛けとなった一  
句と思われる。

主宰より川口在住の方なので「第五例会」にお誘いする様  
にとの御指示があったが、その頃の「第五例会」は、川口市  
本町で行なっていた。そこで静香さんは自宅に近い、自転車  
で通える芝の「たかんな俳句会」に、平成二十五年十二月に  
入会された。

静香さんは、東京より川口に引越して来られて川口市社会  
福祉協議会に勤務されていたが、お母様の介護のために退職さ

平成三十年新同人の紹介の欄で、「俳句をはじめたのは、  
母を介護している時でした。一年余りの独学でしたが、やは  
り限界を感じて水明に入会しました」と、記載されている。

静かで控え目な静香さんは少数人数になってしまった「たか  
んな俳句会」を盛り上げて下さる存在感のある方である。

シャンソンの流るるカフェ 秋灯  
ハモニカの音色漏れくる秋灯下  
始まりはチェロの独奏秋深し



トレモロの「サントルチア」よ秋麗

若き日に「マンドリン」を習得したとお聞きした。それ故、楽器や、曲名など音楽を句材に詠まれた句を数多散見する。

三十年の夏季競詠句は、海に育った筆者には感銘の一句である。

思慮深き母の指輪や涼み船

銀漢を窓に納めし山の宿  
麗かや地図を片手に旅靴  
やまびこの声を装ふ秋の山  
春の暮画帳を閉ぢる山の駅

お好きなスケッチに現在も出かけているようで、美しい画帳が、沢山積まれていることと思われる。

二十九年「皐月の会」へ入会された。此の頃から、「水明」の裏表紙の水明抄に載るようになる。句を挙げていくと、日を重ねること、心に響く俳句が詠まれているのが分る。

命名の清書掲げし小春かな  
ドラキュラの話佳境に冬館  
星空へ打てば奏づる氷柱かな

山里の水車の軋み春動く  
秋立つや風のめぐりし星座表

会話にもスパイス利かせ秋灯下

鬼之介主宰もこの句のセンスの良さを感じると評されている。  
裏表紙より次はいよいよ巻頭へ。

地球儀の遠き国より渡り鳥

主宰の作品評で、言い尽くされているので評は控える。しかし巻頭おめでとう。そして新珠賞おめでとう。  
新珠賞の受賞句は、美しい写生句で、スケッチを心から楽しんでる様子が伝わる。

鳥籠となりし大樹や春の星  
自画像の眼差しと合ふ秋灯下  
さくら東風画帳も入れて旅靴

この度の新珠賞受賞に、星野前主宰もさぞやお喜びのこと  
と思ふ。

受賞作の「スケッチ日和」を土台に、次なる一步へ更に前進されます様、願っています。

## 自選二十句

越田 栄子

ぼんやりと富士の輪郭水温む  
春めきて川底動き始めたり  
げんげ田や少女に戻る心地して  
牡丹餅に父の甘さの彼岸かな  
薔薇の芽のくれなるを解く夜の雨  
母の日に添へたき和紙の一筆箋  
ブランドはオーガニックよ蚯蚓這ふ  
青柿のふくらむ朝や紗一の忌  
朝靄に声のみ響く閑古鳥

かなかなや森の暗さに響き合ふ  
新涼の牧に駿馬の蹄音  
露草の瑠璃より朝のひと雫  
離れゆく子の部屋広き今朝の秋  
俯瞰する鳥になりたし大花野  
「おかわり」の嬉しき声や今年米  
足もとに跳ねて一粒木の実降る  
自転車の荷台はみ出す泥大根  
切干や余すことなき日の恵み  
晒さるる寒林にある力癩  
真つ新たな未来始まる初日記

## 縁の糸

星野 和葉

「熊谷句会の栄子さんは、森千代子さん（季音雪圃）の姪御さんですって」こんな噂はいつか耳に入っていた。そんな栄子さんが身近な人となり、この度、新珠賞を受賞した。お目出度い事である。

栄子さんは熊谷句会創立の時から参加している。小川句会が先かと思っていたが、熊谷句会に入る前、千代子さんと俳句の文通をして楽しまれていたという。すばらしい叔母様がいらして幸せな事だ。

古い事になるが、栄子さんは結婚式に二人の叔母様からお祝句を頂戴している。

新樹光曳きて比翼の鳥翔てり 千代子  
無限なり連理の枝に芽ぐむもの 故さだ子

横田さだ子さんは、千代子さんの姉君で、水明の季音同人であった。戴いた当時は、俳句に関心もなく、意味も分からなかったが、改めて見直すと二人の門出にふさわしい、すばらしい句だという事に気付いたという。

離れゆく子の部屋広き今朝の秋  
どくだみの生命力の強さかな  
蝙蝠は闇の番人かも知れぬ  
埋められぬ心の余白に蟬時雨

一句目、熊谷句会で光二前主宰に、初めて貰った特選句である。子供達が独立して空部屋となった。やれやれという安堵感と一抹の淋しさがせまるが「今朝の秋」で気持を切り換え前向きな気持が現われている。後の三句は、熊谷句会に入ってから半年程の間に詠まれた句である。千代子さんとの間で俳句に馴染んでいたとは言え、句会で本格的に学んだ成長ぶりには目を瞠る。地中を這う根でどんどん殖えるどくだみの力を「生命力」という大きな言葉で捉え、蝙蝠を「闇の番人」と擬人法をうまく使い、四句目は心に沁み込んだ蟬時雨から「埋められぬ心の余白」まで詠んでいる。新人らしからぬ力量である。

げんげ田や少女に戻る心地して  
俯瞰する鳥になりたし大花野  
星の砂小瓶に詰めし夏の夕

前主宰の勧めで、熊谷句会の女性五名が野ばらの会に入ってから、野ばらの会は一気に賑やかになった。熊谷から高崎線で句会のある浦和駅に着いた時、大宮読売俳句教室に向かう主宰とエスカレーターで擦れ違おうそう。この事を笑み

を満面にうかべて話してくれる。ある時は「今日は光二主宰と会えませんでした」とがっかりした様子「期待していたのに」と正に少女に戻った様だ。掲句の三句でも分かる様にとにかく若くて明るい。

露草の瑠璃より朝のひと雫  
足もとに跳ねて一粒木の実降る  
薔薇の芽のくれなるを解く夜の雨

小さな物、小さな動きに目を向け、それを逃さず詠む。「くれなる」とあるから薔薇の荂であろう。微妙な動きを良く捉えている。「夜の雨」がうまくはまっている。

ブランドはオーガニックよ蚯蚓這ふ  
切干や余すことなき日の恵み  
縁側に切干広ぐ媪の手  
自転車の荷台はみ出す泥大根  
「おかわり」の嬉しき声や今年米  
夜長断つ緊急地震速報音

近頃は「無農薬有機栽培」を前面に出して野菜など売っている。「ブランド」という言葉に弱い若い人達にアピールしたい句だ。縁側に広げて干した手作りの切干は、甘味を増してさぞかし美味しいだろう。又、どこにもある日常の事も、気負う事なく句にしている。荷台をはみ出す泥大根をどう調理しようかと自転車の主の気持、「おかわり」の元気な声は

何ごとにも変えがたく嬉しい。「緊急地震速報」という新しい言葉も直に句になった。常に句作りのアンテナを張り巡らせている様だ。

桑の実を食めば遙けき日の記憶  
麦稈帽腰に手拭ぶらさげて  
終りなき黽ごっこか草を引く  
山里に命育む飼屋の灯  
桑食むや時雨の如き音のして  
幾万の輝く繭の積み上がる  
引く指に繭の躍るや糸車  
蚕蛾や明日はモスラになれるやも

受賞作品である。

かつては、ちよつと田舎に入れば見られた養蚕。今はほとんど見られなくなった。作者は経験はないが、見た事はあるという。多分、嫁がれる前の小川町の景であろう。新旧の句をうまく交えて「原風景」十五句を纏めている。桑を食む時雨の如き音、幾万の輝く繭、引く指に繭が躍るなど景がしっかりとっている。黽ごっこの様な草とり、蚕蛾をモスラにつなげるなど、なかなか楽しい句作りだ。

数十年前にお祝句を戴いた時から縁の糸は繋がっていたのだ。今が俳句を始めて、一番楽しい時ではないだろうか。これに乗じてますます俳句の道を突き進んでほしい。

頑張れ栄子さん！

山本鬼之介 選



改元日薔薇より多く人の顔  
踏み入らば無心とならむ夏の山  
沈みゆく浮子の波紋や子供の日  
守役を火の粉の襲ふ薪能  
藁の香を宿して誘ふ鯉かな

さいたま 青木 鶴城

水満ちて植田の準備整へり  
風そよぐ植田の隅に余り苗  
あまやかな香と旨み新茶くむ  
庭先で我呼ぶ声や虹立てり  
祈りとも泰山木の花白し

熊谷 越田 栄子

降り立てば古き駅舎に薔薇の門  
草の香の匂ひ立つ朝夏来る  
回廊を尼僧がひとり青しぐれ  
夏休み硝子越しなる回遊魚  
緑さす回転ドアに吸ひ込まる

川口 野田 静香

ノートルダムの焼け落ちてなほ聖五月  
恋若し過ぎたるほどに薔薇真紅  
アフタヌーンティーの憂鬱ばらの苑  
をんな坂にゲイの佇む夕薄暑  
ダンデイの着崩し銀座の夕薄暑

横浜 正木 萬蝶

新茶汲む句の推敲に行詰り  
仮縫のあとの休息新茶汲む  
色鉛筆の白長きまま夏はじめ  
はつ夏や自転車で何処でも行ける  
五月雨の中を渡りて齒科眼科

東京 石川 理恵

刀工の太き腕や濃山吹  
「鈴懸の径」なる歌碑や春惜しむ  
芝青む摩文仁の丘や海光る  
乙鳥や五種の利き酒五百円  
天平の菟をかすめ初燕

さいたま 保坂 翔太

若葉風塑像の乳の影清か  
夏めくや舳先に映る波の照り  
あと二日待てば新茶と告ぐる茶舗  
若楓隣家の庭と分かつ風  
繕はぬままの山門棕櫚の花

さいたま 曲淵 徹雄

露座仏の後光となりて新樹光  
泰山木の花見る度に想ふ友  
虹立ちて子等の喚声結ひの村  
古のれんの銀の天秤新茶の香  
お茶受は虎屋の羊羹新茶汲む

鴻巣 大塚 茂子

郭公や妣とゐるやうな山の畑  
すれすれに沼を飛び交ふ夕燕  
逃げ水や母と一緒に遅刻の子  
夏場所や五万の声が打ち囃ます  
郭公が近くで鳴くや山の朝

西幅 公子

ふる里に父の背で見し桜かな  
紙風船つぶさぬやうに手の中へ  
朝寝する我には我の大義あり  
追悼の秩父音頭や山笑ふ  
師の句碑に灯火ほんのり弥生尽

さいたま 日高 徹

春惜しむ離れ座敷の三次会  
修験者にゆづる山径夏隣  
脇役の際立つ個性熊ん蜂  
陰性をねがふ再診白つつじ  
火蛾攻むる中古車売場常夜灯

行田 近藤 徹平

菊の御紋のボンボニエール春灯  
今日よりは元号令和風薫る  
咲き競ふ薔薇の真中を荒川線  
緑陰にでんと往時の手水鉢  
化粧直し中の洋館薄暑光

東京 太田 絹映

鎌倉の暮れゆく浜の桜貝  
陽炎や我が昏迷の治まらず  
吾が胆に生氣溜め込む立夏かな  
我が庭のことさら狭き立夏かな  
赤き薔薇挿して自ら誕生日

渋谷きいち

葉桜や沼の小道の古ホテル  
葉桜や峽の湯宿の異国びと  
葉桜や神話の里の夜の静寂  
夜のみどりテレビに向かひ独り言  
亡き夫の夏帽未だ捨てがたく

さいたま 中井 和子

黒南風や痴漢注意の回覧板

道行を急かす矢切の青嵐

バラの香やドームに満つるイエスタデイ

夏来り家中の窓開け放つ

ほし梅を満天のほし見張りをり

新茶汲む甘き最後の一雫

住むや誰泰山木の花の燭

新茶淹れ終の一滴まで甘露

乗りのよき秩父音頭や初浴衣

音つくる「セイジ・オザワ」や夏旺ん

蓬つむ青き地球を独り占め

草の香の被さりきたる五月かな

噴水の止まり話の途切れたり

若かりしあの日の私赤き薔薇

一本の紅薔薇にある思惑かな

山鳩の野太き声や夏近し

浮雲を押しやる風も薄暑かな

露の香を薫き込めたるや祝膳

日傘の波が錦帯橋を浮き沈む

ナイターの余韻をいだしバスの中

さいたま 新 曆文

両国をいろどる幟風薫る  
風薫る駅の広場に寄せ太鼓

平戸瀬戸飛魚あじ一色に透けてとぶ

反抗期垣越ゆるかに木香薔薇

「プリンス」に喚声やまぬ薔薇の園

草加 河野はるみ

高崎 原田 秀子

乳飲まず娘眩しき若楓  
老斑の一つなき手や新茶汲む

茶柱立つひとしきり待つ新茶かな

さざ波の光の中を蜆舟

惜春や手紙一束セピア色

上尾 横山 君夫

若狭 飛永 鼓

つつましきなかの贅沢新茶買ふ  
ラジオより昭和の艶歌芥子の花

花川戸男の差せる日傘かな

新緑や部員募集の立看板

襟足がまことあでやか祭髪

さいたま 染谷 正信

さいたま 加藤でん治

接穂削ぐ烏に昼餉奪はれて  
春潮の棧橋平成いろは丸

葉桜のざわめきにただ落ち着かず

絶る手を求めさ迷ふ聖五月

茄子植ゑて明るくなりぬ庭の隅

伊予 向井 章子



夜来の雨に少し萎れし牡丹かな  
初鯉手酌で済ます一夜かな  
池に浮く雲に飛び込む小鯉刺  
鯉織泳ぎ疲れか一日垂れ  
薔薇の香と吹奏楽に身を委ね

さいたま 田中 章嘉

草餅と改札口を通りけり  
名を呼ばればづかしさうな葱坊主  
初蝶やすい坂を昇りけり  
春寒を一気に回す逆上がり  
白牡丹陽にぬくもれる気品かな

さいたま 水野 興二

知らぬ間に紫蘭咲きたる庭の隅  
小田急の車窓流るる青嶺かな  
我が家にも育むいのち夏燕  
ちちははにもらふ若さよ風薫る  
法廷ドラマの結末いかに五月闇

平塚 丸屋 詠子

ぼうたんや傘携へて京の町  
若葉風百葉箱が校庭に  
葉桜や土手を舞台にトランペット  
風薫る古代へ続く古墳道  
音そろふ団扇太鼓や寺薄暑

笹本 啓子

新茶摘む十指に香の絡むなり  
朝焼の紅は仮面よ戯雨  
荒れわたる小鳥の声や訃の知らせ  
西瓜食ぶ父似母似の顔そろふ  
庭に独り夾竹桃の香を受くる

熊谷 神田 治江

麦は穂に令和の御代へ扉開く  
麦の秋灯下穂波の琥珀色  
葎切や水切り競ふ男の子たち  
葎切よ法話中ですおしづかに  
梅は実に妣の苦言をしみじみと

熊倉千重子

干し物のオンパレードや夏初め  
砂利道にはまる自転車若葉風  
魅せらるる薔薇に秘めたる棘ありて  
雲映す水満満と行行子  
田園をつらぬく道や麦の秋

さいたま 宮崎チアキ

「きれいなね」に花びらふるふ白牡丹  
初鯉竜馬の像に会ふ前に  
朗朗と恋の詩を読む立夏かな  
草笛にしばしの昭和よみがへる  
五合目に靴紐きつく富士登山

橋本 京子

鉄柵のペンキさ緑薔薇咲けり  
薔薇百本蝶ネクタイのプロポーズ  
薔薇園の主の手招きハーブティー  
金魚玉甘味処は路地の奥  
高跳びの頂点にゐる聖五月

東京 石田 慶子

六道湖の夕日に押され蜩舟  
花咲ける野に寝ころびて春惜しむ  
筑波嶺の紫けぶる春惜しむ  
枝ゆれて茶庭彩る若楓  
新茶汲む終りの雫分けあひて

栃木 佐々木典子

まぼろしの信長の声薪能  
陋宅に最高級の鯉かな  
幾年を越えて令和の薪能  
初鯉銚子二本で済まぬ夜  
目が点に鯉のフライ新メニュー

さいたま 藤岡真知子

黒堀の寺町ひとり行く薄暑  
夏場所や隅田川辺り草履掛け  
蛍の夜尺八聴いて静心  
葉桜の隙間を埋むるのつぼビル  
放課後のコーラスに入る閑古鳥

さいたま 梅澤 輝翠

新宅へ薔薇のアーチをくぐり入る  
古道への標となりし二輪草  
葉隠れて品格匂ふ花蜜柑  
しらじらと三日月残る今朝の夏  
参道に木もれ陽光る薄暑かな

秋本カズ子

薔薇一輪なれど大輪我が狭庭  
潮騒が恋しか机中の桜貝  
甕をのぞけば万葉の色梅酢漬  
母の日の子も誇らしく稚を抱く  
梅雨曇り待つ人のなき理髪店

川口 田村 節子

ぶかぶかの制服急ぐ柿若葉  
柿の花職引く夫のハンチング  
執拗に真赤な金魚を掬はんと  
屑金魚一つとなりて太りぎみ  
餌を乞ふ出目金くるつと裏返り

森 和子

寝袋干し山恋ふ朝や夏近し  
夏近し展望台の椅子眩し  
聖五月英語訛の辻説法  
夏場所の結びの一番砂被り  
夏めくやただひたぶるにひとつこと

さいたま 大槻 瑤蘭

行々子老犬抱きて土手を下る  
耳疎くなり蔑切の声遠し  
麦秋や通勤圏と決め新居  
夏の朝料亭で撮るドラマかな  
青梅や落ちしひとつをぽんと蹴り

さいたま 山口 富子

浮城の址に独りや青嵐  
空に雲地には香りのラベンダー  
草原にオカリナの音や聖母月  
大風の「令和」の文字や五月晴  
更衣急ぐ自転車力込め

さいたま 村杉 清吉

山肌を一気に染むる緋のつつじ  
薫風や気品うけ継ぐ城の藤  
茅葺の消火訓練虹の帯  
十連休は我が家にじつと聖五月  
物干のやつと修復五月の陽

和歌山 高橋満耶子

行く春の露座仏今日も海を見て  
雲流れ波を遠くに汐干狩  
陽炎の中からバスの歪みくる  
色ガラスの欠片と紛ふ桜貝  
令和なる宮中参賀余花に逢ふ

新井 孝磨

縦縞のネクタイ馴染む五月かな  
挨拶の弾む木道夏山へ  
両頬を五月の風よ深呼吸  
浮草を滑り落ちたる雨蛙  
行く先に木洩れ日をどる夏の山

さいたま 秋山 紅花

葉桜や師の碑横目に通り過ぐ  
小流に洗ふ長靴夕蛙  
新緑や即位を祝ふ長き列  
湖の水面を濡らし花菜雨  
匂ひくるシャネルの5番春の風

若 狭 山崎 郁子

はばかりず少女大笑夏の山  
くすのきの総身萌黄に五月かな  
ナイターの歓声遠き闇夜かな  
香り濃し母の手籠の露の嵩  
灰汁ぬけてみどりひときは山の露

山口 韶子

八の字に燕飛び交ふ蔵の街  
加須の空に夢をも喰らふ鯉職  
落書や末は画伯か子供の日  
力強きシュートの一步夏の芝  
もう一つ食べたや母の柏餅

さいたま 福田 育子

今朝の気到大樹の光る立夏かな  
洋風の家のフェンスにばら似合ふ  
行き交ひて道を狭めし春落葉  
目を閉ぢて鳥の声聞く五月晴  
夏の山もういと云ひ次思ふ

さいたま 塩野 久子

牡丹と藤見し夜の寝つかれず  
子供の日子供さておき夕食会  
熟練の庭師売り込む植木市  
海には海の山には山の初夏の風  
鳥の巢望遠鏡が捉へけり

蕨 細井 良子

漆黒の闇に漂ふジャスマイン香  
ツイードのうねる紋様毛虫這ふ  
よく見れば愛らしき目の毛虫かな  
白あやめ午後の光の燭台に  
梅檀の花の木陰の契りかな

大阪 飯塚智恵子

五月雨や捨てし田圃に張る木の根  
恭し試飲の新茶もどかしく  
新茶よりなみなみと注ぐ古茶を請ふ  
直ぐそこに見えて迂回す道をしへ  
道をしへ今十字路に別れ来し

東京 水落 守伊

牛の曳く鳥の乗り合ひ若葉風  
長通院目出度く終はり風薫る  
青梅を拾ふ人なき里暮し  
風やさし総て植ゑ終へ千枚田  
新茶受く此処は北限産地とか  
中庭の空は真四角夏模様  
明け易し夢の男は先に行く  
夏つばめビルの中庭急旋回  
遠富士の雲着て丸し五月の野  
夕暮れの梢に一羽鴉の子

いすみ 平石 睦子

横浜 山岸 弘子

薔薇の門くぐりて吾等聖者たり  
母の日や何処が痛いと言はない日  
就中風音高し武者幟  
鳥帰るやつと名前を覚えしに  
釣人の魚籠は見ちや駄目花菖蒲  
目葉のあとのまたたき初夏の風  
茉莉花の香りたゆたふ散歩道  
こどもの日何で何でに梃摺りぬ  
こどもの日ゴーヤの苗を植ゑました  
麦の秋母を見舞ひてあとさびし

横浜 川島 典虎

さいたま 高橋 敏子

試歩一步砂塵にまみれ聖五月  
仏だんに亡き子の遺影兜出す  
音ひとつ風鈴の糸見えぬとき  
青梅落つ気高き花の化身かな  
せめてもの音を樂しむ遠花火

さいたま 伊藤 愛子

静寂な湿生花園破れ傘  
大涌谷にあがる噴煙薄暑光  
石垣のくづれし史跡薄暑かな  
ゼロ続くスコアボードや夏の雲  
郭公に背中押されて峠越え

さいたま 竹澤 和子

深々と礼平成の春をしむ  
桐の花新天皇を遠目にす  
地下鉄に高低差あり燕来る  
人間に長き休日蟻地獄  
先生の声すき通る聖五月

下川 光子

子供の日父親多き遊園地  
目前に燕の子落ち飛び立ちぬ  
風薫る鯉飛び上り服ぬらす  
薫風や忍耐強く編物す  
薫風や色紙に書きて誕生祝

和歌山 南條さわゑ

黒南風や羽黒の山はたちろがず  
駅毎に烏賊焼く香り五能線  
急坂の棚田に重き早苗籠  
五月晴父子が土手に大の字に  
若衆の気負ひを見する背の団扇

川村 治

捨てられぬ父の文なり花空木  
菖蒲湯やテレビと猫と十連休  
少女らの白き二の腕薄暑光  
菖蒲湯や令和元年傘寿なり  
夕薄暑背中合せの駅の椅子

さいたま 田中 泰子

青梅のホールインワン溝に入る  
犬の背に青梅落つる雨上がり  
また一つ空家ふえたり実梅落つ  
明易や健診結果気にかかる  
先の見えぬ愛犬の看病明易し

松田 朋子

老舗の並ぶ麵街道に風薫る  
吾もまた買物弱者麦の秋  
麦秋や昼間につづく夜の雲  
春の日や令和に折る人の波  
昭和の歌をうたふサロンや風薫る

杉戸 佐々木史女

引き物に急須を選ぶ清和かな  
葉桜の石垣に馳す山の城

さいたま 山戸 美子

急かされてリハビリ登山計画す  
葉桜となりて静けさ戻る朝  
母の日や初心に戻り花贈る

娑婆の苦に噴水高き寺泊り  
噴水にお喋りな鳥ひとしきり  
竹の子や十連休の酒五升  
母の日やあなたの息子で有り難し  
陽炎に仄かや姫の柳腰

小浜 松島 寛久

青しぐれ野草探しの二人づれ

和歌山 葛城千世子

スコップを上下左右に浦島草  
ふと浸る民話の世界浦島草  
浦島草見つけ土ごと持ち帰る  
それぞれの好みのケーキこどもの日

境内の新樹馨し無縁墓  
手を振りて朝の挨拶新樹光  
野の花の丘新緑の谷一望  
深緑の溪脈々と民の意気  
語らひとレコード夏の夜は更けて

宮代 関谷多美子

沼辺より瑠璃色の雨かな女の忌  
あきざくら絵筆がさがす淡き色  
朝顔のなほしてもまた左巻  
金柑にふくかぜまるく村まるく  
思ひ出ばかりかけめぐる醉芙蓉

所沢 関根 千恵

草木をうるほす雨や夏来る  
心地よき風が吹くなり夏来る  
熱熱の白き御飯や緑の夜  
一人居の夕餉は手軽冷奴  
古希過ぎて好きになるなり冷奴

さいたま 高原 和子

夜明け前ぼうたんの花白白と  
談林へつづく参道著我の花  
せせらぎに夕日映してかじかなく  
馬籠宿半蔀上げて夏は来ぬ  
山城へ登る小径は木下闇

さいたま 白田 みち

新緑に木洩れ日映ゆる雅の車列  
緑映え雅の車列ゆるり行く  
藤揺れて極楽の余風あまかぜ気淑く  
野を繋ぎ鯉のたはむる人の和も  
郭公や山谷こえて牧歌のやう

東京 河原 叔子

早朝の静寂の中の閑古鳥  
秩父路のライン下りも薄暑かな  
青空へ抜くる鳥声山ざくら  
葉桜のもたらず影に一服す

さいたま

小川 洋子

縮緬の根付けに秘めし蜆貝  
里人の心根美しき花の山  
連休明け祇園土産の新茶汲む  
靄の中幽玄醸し青楓

春日部 諏訪サヨ子

彼の白馬現れさうな湖五月  
水馬や表面張力凹ませり  
余花散らす儂き力ありにけり  
君とまた夏嶺に響くハーモニカ

石田水音子

朝焼に目覚め手術の朝となり  
雲流れ朝一番の新茶の香  
泰山木の花大仏の許に咲く  
虹立つは良き前触れか心浮く

東京 鈴木 和子

舗装路の端の振花ど根性  
食らひ付く野鯉の跳ねて夏近し  
驟雨去り常磐線のふたりかな  
常日頃思ふ事あり鉄線花

飯田 忠男

文人の進まぬ筆や糸柳  
春日傘右に左にまはず君  
糸柳銀座のカフェの苦き味  
薫風や柺目正しき曲げわっぱ

川崎 鈴木 玲子

葉桜の木洩れ日の下人憩ふ  
葉桜の退位と即位歴史絵巻  
葉桜や令和元年厳かに  
夏日から急転直下十一度

高 わこ

朝焼を背負ひし電車西方へ  
朝焼やラジオ体操の輪和む  
子の見上ぐ矢車カラカラ風強し  
仏壇に愚痴を言ひつつ新茶注ぐ

さいたま 緒方みき子

改元や筍飯と夕散歩  
令和まで待てぬ友の計青嵐  
愛想よく生きる余生や冷奴  
カタコトと夜明けの電車大賀蓮

山下ユリ子

朝焼や朱の綱繫ぐ夫婦岩  
朝焼や開かずの踏切鳴り止まず  
朝焼の染むるレンガの東京駅  
住職の後継ぎ紹介新茶注ぐ

東京 飯室 夏江

躊躇する背中押したる花水木  
トンネルを抜けて眼下に初夏の海  
初夏や放流の稚魚まつしぐら  
見渡せば入江は舞台夏はじめ

若狭 岡本 祥子

風光る湾にはためく大漁旗  
若葉風授業抜け出し裏山へ  
白牡丹バレリーナの衣装かな  
リラの夜異国に暮らす子を想ふ

さいたま 湯浅 和

「幼児に苗えらばせて茄子植えり  
補聴器の夫に嘔り数多なり  
盲目の奏でるシヨパン母の日に  
風薫る鄙のひと日のオベラかな

鬼石 榊原 聰子

長寿の友に店主すすむる新茶買ふ  
飛鳥山車椅子ゆく春惜しむ  
大空に日影あやなす若楓  
若楓せせらぎ誘ふ川辺かな

安倍 弘夫

雨去りてみはるかす森新樹燃ゆ  
リフト揺れ新樹分け入る高尾山  
みささぎの新樹の池の波紋かな  
白藤の香りほのかに多摩御陵

さいたま 森下美智枝

茶会済む安堵や寺の夕牡丹  
八角蓮茶会の一輪声あがる  
玫瑰の蕾は凜と頭上ぐ  
唐突にさくら泣かせの春の雪

藤 沢 小島喜代子

新樹光ゆつたり続く最上川  
歓迎の舟唄流れ新樹光  
五月場所最頂力士に声囁らし  
船上から港の花火迫力なり

野村 美子

日傘さす木木の葉が目まぶしくて  
出目きのきらりと光るジャンプかな  
柿若葉吹かれて光り遊びけり  
水槽の金魚一匹夢をみる

さいたま 内田 雅代

牡丹園好みの前に愛づる吾  
牡丹や透けたるチュチュのバレリーナ  
雷雲の広がる空にヘリコプター  
好日になほの安らぎ新茶かな

武田 重子

柿若葉狭間狭間に日の光  
耐へにたへ綺麗に咲きぬ柿の花  
水槽にあの出目金の目が可愛い  
柿若葉見上げる顔や立ち話

落合 和枝



朝掘りの竹の子ご飯供へけり  
畑の隅大きなつぼみアマリリス  
山下り女七人竹の秋  
若葉風小犬と歩く歩道橋

鬼石 加藤ナヲ子

山間の鳥に呼びかけ草の笛  
飲み込まれさうな新樹の山の奥  
妻思ふ万葉の歌碑新樹光

越谷 阿部 幸代

柿若葉ビタミンの風降り注ぐ  
柿若葉荷造り終へて空の旅  
金魚菜て独り居の家賑はへり  
柿の花いくつ残るや雨激し

さいたま 長井喜代子

リズム良く散髪鉢夏に入る  
南風丘のネモフィラ揺れ止まず  
ホバリング続く蒼天揚ひばり  
煽ぐより飾りに映える京団扇  
遠花火夫婦喧嘩もひと休み  
紫陽花の雨に弾ける笑顔かな

佐藤 克之

春暁のパリの街角パン匂ふ  
母の日や巴里に招きてエスカルゴ  
ブラウスの眩しき白さ夏立ちぬ  
母の日や遺影の前に花二輪

反町 修

日の眩し糸瓜の花に屈むくせ  
含羞草遊びごころの園児触れ  
茅草の駆られて家の窓開く

東京 齊藤たけし

田植終へ夜の棚田に百の月  
田植の夜棚田は切り絵の星の空  
たかななの皮はぐ音と土の香と

三郷 沼尾 岳

街は今新樹の海に沈みをり  
乳母車押す手にそつと新樹光  
踊り子のチュチュのごと揺れ八重桜

さいたま 菅原 真理

あどけなき子らくスクスと花すずらん  
さだめさだめと声なき声の夏落葉  
たけくらべするや背伸びのねぎ坊主

吉川 杉浦 理恵

軽トラの荷台に泳ぐ鯉職  
飲んでけと新茶勧むる飲み仲間  
風薫る広野を走る新幹線

鈴木 藻好

# 作品評

## 山本 鬼之介

改元日薔薇より多く人の顔

青木 鶴城

国民が一樣に関心を抱いた新元号であるが、今年四月一日に「令和」と決まり一段落した。四月三十日から五月一日にかけての平成天皇のご退位と令和天皇のご即位の様子をテレビで視聴し、万感胸に迫る思いであった。やはり、天皇陛下が皇位を皇太子に禅譲され、上皇として上皇后と共に穏やかに余生をお過ごしになるという、明治以降これまでに前例の無かったことによる共通の思いではなかったかと思う。万葉集から引用したという令和の元号については賛否両論があったようだが、筆者個人としては賛成である。

令和が始まった日とその前日、これまでの宮中参賀に例を見ない多くの人々が皇居へ出向いたと報道されたが、多さの比較の対象に「薔薇」を選んだ掲句に感じ入った。「プリンセス・ミチコ」との共通項もあるが、五月から七月を盛りとするこの花に群集の顔を重ねたところに妙味がある。

折りとも泰山木の花白し

越田 栄子

泰山木はモクレン科の常緑高木で、樹高は十メートルくら

いが普通のようなだが、放置するとその倍くらいに伸びるようだ。長楕円形の大きな葉と、初夏に咲く白色大輪の芳香のある花が特徴である。堂々とした立派な樹木と、香しい大輪の花にちなみ、花言葉は、「前途洋洋」「威厳」「壮麗」となっている。昭和記念公園ほか、各地の公園や植物園で見られるが、小まめに剪定して樹高を抑え一般家庭の庭でも栽培されている泰山木である。

作者は、六十二弁からなる大輪花の形に、折りの時の手の形を重ねているのか。気品のある花に対する最高の讃辞と受け取れる。

降り立てば古き駅舎に薔薇の門

野田 静香

人でごったがえしている都会の駅ではなく、地方の私鉄の駅舎のような気がする。駅長の心入れによって、駅舎の前に薔薇が植えられていて、見事なアーチが作られている。駅の建物は古いが、手入れが行き届いてなかなか風格がある旅行マニアの中では結構識られた駅なのかも知れないが、作者にとっては初めての駅であった様子が見て取れる。

自分を歓迎するために作られた薔薇の門であるかのような喜びの気持がこの一句に籠められている。

をんな坂にゲイの佇む夕薄暮

正木 萬蝶

ゲイが佇む坂として、男坂が相応しいか、それとも、女坂

かと、作者は先ずその選択を考えたと思う。その結果が女坂になった訳だが、筆者としてもそれでよかったと思う。作者が、ゲイの人物の心になりきっての動きが、この俳句に表れている。心は男であるが、言葉遣いや身ごなしは女という二面性を「夕薄暑」が醸し出しているように思える。

### 色鉛筆の白長きま夏はじめ

石川 理恵

納得のゆく一句である。油絵や水彩画に用いる白の絵の具ならともかく、色鉛筆の白となると、その使い方が難しいような気がする。どんな色にも染まる白でありながら、犯しがたい個性を貫いているような白である。「夏はじめ」という瑞瑞しい季節感と、「長きまま」という色鉛筆の白のこれからの暗示が、俳句の奥行を深めている。

### 天平の薨をかすめ初燕

保坂 翔太

井上靖の歴史小説「天平の薨」が即座に浮かぶ俳句である。この小説を基に、東宝の映画や前進座の舞台などで演じられ、多くの人の心に強い感動を与えた作品である。日本から唐に渡った四人の留学僧が、苦難を重ねての努力が実り、七五三年（天平勝宝五年）に唐の学僧・鑑真が苦難をおかして来日。七五九年（天平宝字三年）に戒律道場として唐招提寺（律宗大本山）を建立し大和上の称号を賜った。

掲句の作者が、小説の題名と、今なお奈良の地に悠久の昔

の面影を残している唐招提寺の大薨を融合させて詠んだ俳句であると思う。目には見えない雄大なロマンを、具象的な初燕によって読者にくつきりと示した手腕に驚嘆した。

### 夏めくや舳先に映る波の照り

曲淵 徹雄

小波を掻き分けて進むヨットか小型の漁船を想像する。実際には、波が反射した太陽光が船の舳先に当たっているのだから、「波の照り」としたところが上手い表現で、軽快な船の動きが伝わってくる。想像で書いた俳句ではなく、作者の実体験にもとづく力強さがある。

### 夏場所や五万の声が打ち噛ます

西幅 公子

迫力満点のこの句に惚れこんだ。調べたところ、夏場所の会場である両国国技館の座席数は、一万一千余であるから、五万はかなりオーバーな数になる。しかし、巨漢揃いの大相撲の世界を詠むには、このくらいはったりを利かせて丁度良いだろう。相撲における「打ち噛まし」は、立ち会いの時に前頭部や肩で相手力士の胸部辺りに突っ込んでゆくことで、成功すればかなりの威力になる。打ち噛ましの得意な力士は、五十三代横綱の琴櫻が有名で、現役時代に猛牛の異名が付いていた。筆者の少年時代にファンであった松登も得意としていた。

夏場所名勝負の大一番、制限時間いっぱいまで両力士が塩を

撒き向かい合うと、管内に万雷の歓声が沸き上がる。まさに、両力士への観客の打ち囀りである。

### 春惜しむ離れ座敷の三次会

近藤 徹平

晩春の宴の後、参加者を絞つての二次会が果てた。離れ座敷での三次会という件りに、俗人の筆者としては尋常ならざる雰囲気を感じてしまう。作者の言わんとすることは合致していないかもしれないが、そう思いたくなる要素が潜在している。爪弾きの三昧の音のつて、小唄の一節が聞こえてきそうな艶なる一夜である。

### 鎌倉の暮れゆく浜の桜貝

渋谷きいち

春の暮色につつまれた鎌倉由比ヶ浜の情景であらうか。女性にとつては幼児の頃から心に宿っている桜貝であり、男性にとつても心の安らぎを覚える桜貝である。今日一日気づいてくれる人の無かった桜貝。ロマンを感じる反面、世間から見捨てられた孤独な人間を投影しているようにも思える俳句である。

### 虹立ちて子等の喚声結びの村

大塚 茂子

住人が互いに協力し合つて生活している村里。田植や山仕事、萱葺き屋根の葺き替えその他諸々の仕事を人力に頼っていた昔には多かつた結いの村も、労力が機械化された現今で

は殆ど姿を消してしまった。しかし、未だにそのような素材を残している村もあるだろう。山と山に架かる大きな虹の出現に喚声を上げる純朴な子供達。明るい未来が待っている。

### ふる里に父の背で見し桜かな

日高 徹

久方振りに故郷を訪ねた作者が旧友と花見に出掛け、数十年前、父親の背に負ぶさつて同じ桜を観たことを想いだした。父の背の温みと匂いが胸中に広がつてゆく。自分と同様に立派に成長した桜の木と対面して幼き日への郷愁が一層濃くなつた。目の前の桜が、過去への道標となつて作者をいざなう。

### 咲き競ふ薔薇の真中を荒川線

太田 絹絵

車輛が綺麗になつて「さくらトラム」という愛称が付けれ、人気がますます高まつている都電荒川線。三ノ輪橋から早稲田までの三十停留場、一・二・三キロメートルの沿線は、飛鳥山の桜や線路際の薔薇を愛で、鬼子母神やお岩様の寺などの歴史・文化に触れたり、とげぬき地蔵のある生活感あふれる昔ながらの商店街を散策するなど、俳人にとつても楽しく句材満載の路線である。

掲出句の薔薇は、作者が住んでおられる街の沿線に咲き誇る薔薇であり、車窓から眺めていると、まさにこの句のとおり情景であることを筆者も体験している。

## 葉桜や沼の小道の古ホテル

中井 和子

沼を取り巻く桜の木。今は葉桜が沼を花の時季とは違った霧囲気にしている。沼の畔にあるいわくありげなホテル。そんな古ぼけたホテルに泊まる客はいるのだろうか。演歌の歌詞にでもなりそうなホテルである。湖であれば、高峰三枝子の「湖畔の宿」の甘く切ないムードに繋がるが、沼であるからそうはならない。ヒッチコック監督のスリラー映画「サイコ」がびつたりであり、それもまた良しである。

## 道行を急かす矢切の青嵐

新 暦文

往年の演歌「矢切の渡し」の舞台がそのまま俳句に詠まれているが、あの男女のやりとりを「道行」と簡潔に表したところに妙がある。もっとも、現今では道行という言葉自体が使われないので、この俳句自体が陳腐なものとして片付けられかねない運命を孕んでいる。しかし、現代でも男女が矢切の渡しを使って逃避行する可能性はあるのだから、そう簡単に見捨てるべきではない。

## 乘りのよき秩父音頭や初浴衣

原田 秀子

秩父音頭の家元と兄の金子兜太氏も故人となり、秩父音頭が寂しく感じられる。渋い正調の唄に合わせて踊る秩父音頭

の所作の一つ一つに秩父の四季が彩られてゆく。男女の初浴衣姿が夏の夜を輝かせている。

## 噴水の止まり話の途切れたり

飛永 鼓

高く上がったたり低くなったりと規則的に水を操っていた噴水がぱたっと止まる一瞬、それに連動したかのように、近くにいた二人の会話が途切れた。気まづい空気が流れたが、噴水が動き出して会話も再開した。われわれの日常においてもありそうな情景である。

## 浮雲を押しやる風も薄暑かな

加藤でん治

天空の雲と風との駆け引きを見ていると楽しくなる。雲の大きさや形、そして風の量と強さ。まさに人間や動物の勝負を見ているようだ。浮雲の形とそれを押しやる風に、微妙な薄暑の季節感を見出している作者である。

## まぼろしの信長の声 薪能

藤岡真知子

薪能を鑑賞していた作者の脳裏に、「人間五十年 下天の内をくらぶれば 夢幻の如くなり…」の幸若舞「敦盛」の一節が浮かんできた。桶狭間の合戦の前に織田信長が自ら謡い舞ったものとして伝えられている。眼前の能楽師に信長の魂が乗り移り、この一節を謡いつつ舞っているかのように思えてきたのであろう。なかなか奥の深い傑作である。

## 水琴窟

(水明集六月号鑑賞)

池田 雅夫

仮眠車の並ぶ静寂や朝霞

山戸 美子

高速道路のパーキングであろうか。はたまた主要幹線道路かも知れない。夜通し絶え間なく走っている車も、明け方のほんの一瞬途切れ静かな時がある。長距離トラックが並ぶ駐車場では仮眠中なのだ。静寂と朝霞がかみ合っている。

ゆく春やツーステップの影法師

福田 育子

「ツーステップ」の語がおもしろい世界を描きだしている。おそらくスキップをしているのだろう。希望に満ちた春がやがて終ろうとする時の流れを称えている。「影法師」としたところに工夫がみられ、ゆく春の曖昧さと同調している。

陽炎や朽ちるに任す水車小屋

田中 泰子

山梨県の忍野八海を思い浮かべる。富士山と水車の取り合わせが写真愛好家に人気がある。最近、水車はあまり見かけられないが、郊外の飲食店の設けとして見ることもある。無為自然の「朽ちるに任す」は素朴な趣きを醸している。

折り紙の鶴やパンダや日の永き

山岸 弘子

「折り紙」の語について反応してしまった。小生も多少、折り紙を手懸けるからだ。暮れかねる部屋で手の空いた時間を折り紙に興じている。その手許の明るさを実感している。折り紙のパンダは珍らしい。折り紙に手馴れておられるのだろう。

幼な子の笑顔満載箱ブランコ

関谷多美子

「箱ブランコ」は三〜四人乗りの幼児用のものだろう。長内ふみをの句に「ふらここに乗つてゐたい子乗りたい子」がある。譲り合う謙虚さも大事だが、数人が一緒に乗る楽しさが「笑顔満載」に表われている。「幼な」の「な」は不要。

山吹散る底無沼と云ふ淵に

瀬戸雄二郎

古く万葉にも詠まれている我が国固有の山吹。一重の山吹は果実をつけるが、八重は結実しない。山野の湿った場所を好むようで、満々と水を湛えた淵の上に咲いているのだ。深い淵の碧と山吹の黄が対照的である。底無沼に無気味さも。

俯瞰せる秩父盆地や薄霞

竹澤 和子

秩父ミューズパークから眺める秩父盆地は雲海として多くの人の関心を集めている。雲海に浮かぶ秩父ハープ橋と武甲嶺は幻想的な光景を見せてくれる。魅力あふれる句に共感。

陽を覆ふ薄絹雲や春時雨

小島喜代子

走る火に暫し見蕩れて雁供養

石田水音子

雲形十種のうち、いちばん高い上空にあるのが絹（巻）雲である。上昇気流の水蒸気が上空で冷やされてできる雲である。雨雲はもつと低空の乱雲、乱層雲のこと。不安定な天候にも、さまざまな雲を見て気分転換をはかっているのだろう。

剪定のためらひのなき鉄音

鈴木 玲子

春愁や金平糖を噛んでみる

杉浦 理恵

梨やぶどうなどの果樹の生育や結実を均等にするために枝先を切ったり、枝を間引いたりするのが剪定。素人にはどの枝が不要で、どの枝を残すのか解らない。熟練の作業に無駄もためらいもない。もくもくと鋏を動かしている職人技。

七回忌参道脇に残る雪

湯浅 和

夕空を真一文字に鳥帰る

反町 修

最愛の人を亡くして虚しい生活をおくっていることだろう。早いもので、七回忌を迎えた。何年経っても思い出は消えることがなく、いつもそばにいるようである。参道の傍らに残る雪に、故人の無念さを察しているのかも知れない。

紅梅のさかりなり町すたれゆく

榊原 聰子

風に散り風に流され花筏

沼尾 岳

「さかりなり」で切れ、「町すたれゆく」と別な事柄に転換するみごとな切り換えに驚嘆した。紅梅の華麗さと相對する町の憐れさが強調されている。漢字とかなの使い分けも妙。

桜は咲いているときはもとより、散る様や散った後までも惜しまれ、さまざまに表現されている。「風に…風に…」の繰り返しが花びら一片一片を捉えている証である。



鼓

笛

集

山中順子選



無住寺の深き弾痕木下闇  
蹲踞に映る泰山木の花  
カーネーションネオンのかげの痴話喧嘩

近藤 徹平

水槽は光の楽園熱帯魚  
手短に参拝すませ蝮酒  
空の青海のあをさや枇杷熟るる

染谷 正信

紫陽花や船屋を濡らす雲厚し  
盛切りの飯の茶碗や梅雨湿り  
友からの詩集届きて青嵐

田中 章嘉

男梅雨酒場に残る女傘  
万緑の夜は漆黒海の底  
憧れの田舎暮しや草いきれ

渋谷きいち

大黒天の眼きらりと濃紫陽花  
額の花飛び出しさうな仁王の目  
今日の色衣にしたき七変化

高橋満耶子

久久の朝のスープや桜桃忌  
太宰忌や夢中になりし文庫本  
不安なる雨音続く太宰の忌

高原 和子

鍋島なる作陶の里緑濃し  
鶯の美声響かす陶鳥居  
お富士さん登る文京のあぢさゐ祭

鈴木 和子

水替へて目高の群れを驚かす  
サーファーの波を選んで九十九里  
夏服や少女は爪に花咲かす

笹本 啓子

山藤を伽監に散らす雲巖寺  
回廊や魚板の響く夏木立  
靄晴れて石楠花包む塞の神

諏訪サヨ子

昼薄暑患家を探す救急車  
町薄暑下手な交通整理人  
登園にそろそろ厭きて薄暑来る

瀬戸雄二郎



落慶の拍手こもりて半夏生  
修復の社殿際立つ青水無月  
手の平に青水無月のとうふ切る

下川 光子

紫陽花を描き添へ一筆便りかな  
五月ばれ盆栽市の声高し  
蚊を叩き眠れぬ夜のラジオかな

塩野 久子

春の池万の命が波を打つ  
万緑に抱かれ父と子Wサイン  
気仙沼に出漁響く夏の暁

菅原 真理

雨来るか白くありなん栗の花  
夫の酒の友にちりめん青山椒  
ホトトギス背戸の庭木に来たるらし

榊原 聰子

房数多噴き出すごとく栗咲けり  
十葉の匂ひもなじむ八十路かな  
桐の花揚げば空の広きこと

佐々木典子

点在すパオの集落競べ馬  
パオを打つ激しき雷雨夢うつつ  
壊れ戸を紐で結びし暑さかな

田中 泰子

猫二匹戯れも飽く日永かな  
宿下駄の音のしめりや梅雨の月  
ラジオ手に午睡の枕小座布団

田村 節子

雨待たる日日よ紫陽花うなだるる  
田植機の音するけふは日曜日  
令和きて男の日傘ちらほらと

寺内 洋子

今もなほ母校キャンパス濃紫陽花  
青梅雨や夫の笑顔の千万言  
山裾の団地子供の夏が来た

関谷多美子

山路の揃ふ切り口薄みどり  
ばちばちと和傘を弾く戻り梅雨  
ミュージカルの輪のふくらみぬ初夏の街

鈴木 玲子

☆

☆

# 鼓笛集作品評

山中 順子

紫陽花や船屋を濡らす雲厚し

田中 章嘉

紫陽花が咲いている所は主に山とか平らな陸地に咲いているのが常であるが、この作品は海に咲いている紫陽花を詠んでいる。だが主語は舟屋であるから、どうしてと疑問も生じるが、これはこの作者の感じ方が俳人特有の感覚と思えばうなずける。船端を叩く波の音が耳ざわりよく聞こえてくる。これこそ日本の原風景ではないだろうか。しっかりと排句に仕上っている。

大黒天の眼きらりと濃紫陽花

高橋満耶子

額の花飛び出しさつな仁王の目

両句とも目に焦点を持っていくところが眼目であろう。それに二種類の紫陽花を配したところで更に二体の仏が鮮明に主張してくる。かすかに驚きと詠嘆のこもった作者の感動が爽やかに伝わってくる。

鼓笛集巻頭（七月号）

私の好きな一句（自句自解）

大塚 茂子

人の手を拒みて美しき崖の百合

物を作ると言う事に興味を示すのは、どの時代の子供も同じです。私が子供の頃それは粘土細工でした。それも秩父では「ねば土」と呼ばれる土を、山に採りに行きました。

この句はその土を一人で採りに行った時の景です。行きは夢中で登り、帰り道で迷い、兎に角この崖を下って行けばの想いで、崖を夢中で降りました。ホツとして振り返った時に見た、百合の美しかったこと……。今でも里の裏山には、美しい百合が見られます。

## 鼓笛集の書き方

- 俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
- 二百字詰原稿用紙をお使い下さい

編集部

# 句集喝采

井口 俊晴

## 川島一夫 「人地球」

現代俳句協会

著者略歴 昭和八年生。二十八年「麦」入会、「牧羊神」同人。三十年「青年俳句」同人。三十二年「黒」創刊。三十六年「反グロニア」創刊。四十年「オブジエ」創刊。四十八年「花」同人。平成十年「現代俳句を考える会」主宰。現代俳句協会会員（広報部員、年鑑部委員、理事など歴任）。

高校生の頃から受験雑誌や新聞などに俳句を投稿していた。その関わりの深さは略歴欄を見て明らかである。句集の帯に「俳句表現は無敵だ。それは人に似ている。また地球と宇宙の関係にも似て未だ未知を孕んで静かだ」と。

春の日の遠浅の海は地の頭蓋

弁護人めきてサボテン朝屋台

緑蔭をバス出たとたんな津波

陽炎へぬつと白い根赤い車体

全七章のうち最初の章「血潮」の句。昭和四十六年から平成十一年まで、句集としては未発表のものを集めた。

著者は東北・白河の地で青春時代を過ごした。第二章「震災」には大震災を詠んだ絶唱が並ぶ。

冬空へ「高い高い」されたい震災児

寒い地へ火を焚く祈り震災忌

ある日緑の海へ都市沈む

その気持ちは第三章以降も絶えることがない。

東北の鬼出よ津波炎上す

あの日以後象の目をして春の海

## 朝倉由美 「銀河仰ぎし」

文學の森

著者略歴 昭和五年東京生。平成六年「NHK学園生涯学習通信俳句講座」で独学。八年「港」入門。十三年「港」同人。

平成三十年に八十八歳を迎えた著者の第二句集である。大牧広主宰（三十一年四月二十日逝去）に「頑張ってみたら」と言われ「何か生きて来た証が欲しい」（あとがき）と思いつ断した。巻頭には大牧主宰の祝句「冬牡丹いのちの色を見せにけり」が寄せられている。

あの熱き思ひあらたや終戦日

料峭や学徒動員耐へぬし日

焼け跡に銀河仰ぎし頃思ふ

出征の兄と仰ぎし冬銀河

反骨は父ゆづりかも賀状書く

反骨精神は父親ゆづりかもしれないと著者は言っているが、亡くなられた大牧主宰の社会性俳句の影響が感じられる。

桜桃忌人生駆け抜け来し思ひ

気の迷ひ解けて術後や秋芽吹く

桐一葉心に沁みる医師の声

未だ未来あるを信じて苗木植う

太平洋戦争、敗戦、そして戦後の驚異的な復興。時代を駆け抜けて来た筆者であるが、高齢になれば、病気による入院、手術は避けられない。それにも負けず「未来ある」を信じてやまぬ筆者である。

# 水 明 抄 鬼 之 介

改元日薔薇より多く人の顔  
 祈りとも泰山木の花白し  
 降り立てば古き駅舎に薔薇の門  
 をんな坂にゲイの佇む夕薄暑  
 色鉛筆の白長きまま夏はじめ  
 天平の薨をかすめ初燕  
 夏めくや舳先に映る波の照り  
 夏場所や五万の声が打ち囃ます  
 春惜しむ離れ座敷の三次会  
 鎌倉の暮れゆく浜の桜貝  
 虹立ちて子等の喚声結ひの村  
 ふる里に父の背で見し桜かな  
 咲き競ふ薔薇の真中を荒川線  
 葉桜や沼の小道の古ホテル  
 道行を急かす矢切の青嵐  
 乗りのよき秩父音頭や初浴衣  
 噴水の止まり話の途切れたり  
 浮雲を押しやる風も薄暑かな

青木 鶴城  
 越田 栄子  
 野田 静香  
 正木 萬蝶  
 石川 理恵  
 保坂 翔太  
 曲淵 徹雄  
 西幅 公子  
 近藤 徹平  
 渋谷きいち  
 大塚 茂子  
 日高 徹  
 太田 絹映  
 中井 和子  
 新 曆文  
 原田 秀子  
 飛永 鼓  
 加藤でん治

句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第1水曜・午後1時	本所ビッグシップ	山中みどり	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアール	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・ 午後1時30分	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	吉澤純枝 山田美佐尾
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉 代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中 順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

## 水明例会案内

水 明 令和元年八月一日発行 毎月一日発行

(第九十二卷 第八号) 定価 一〇〇〇円

季音抄 鬼之介

弁天の化粧剥落半夏生  
仁王の眼に雫を見たり梅雨晴間  
生るる匂ひ朽ちゆく匂ひ木下闇  
僧二人縫ふやうに来る木下闇  
陥ちゆくは蟻か私か蟻地獄  
馳せ参ず月下美人の宴とや  
飛天図の指の先より梅雨の蝶  
山鳩の胸たくましく青嵐  
朝市の女したたか蟾蜍  
柿の花はたちの母の古写真  
紀の国の宿で解せり鮎の骨  
麦秋や仁王の腕に乾く塵  
時の日の銀座を統ぶる時計塔  
時の日やメトロノームのつまらなさ  
蘆青む影の深さに稚魚の群れ  
万緑を登れば式部筆の跡  
風鈴を付けて進むや車椅子  
子供みなきらきらネーム夏祭

茂木 和子  
森 千代子  
矢作 水尾  
山中 順子  
山中みどり  
由良ゆら女  
吉澤 純枝  
森田 祥絵  
鳥羽 和風  
高島 寛治  
小倉 倭子  
宇田 白鷺  
大場 順子  
田中 千穂  
森川 義子  
松宮 保人  
宮崎 雅訓  
山田美佐尾

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内